

鹿児島大学大学院人文社会科学研究所
(博士後期課程) 地域政策科学専攻

プロジェクト研究報告集

2023.3 No.20

地域に眠る宝を活かして

— 「孤・個」の歩みから 「共」につながる社会へ—



鹿児島大学大学院
人文社会科学研究所 地域政策科学専攻

今年度のプロジェクト研究について

三木夏華
(プロジェクト研究担当)

「プロジェクト研究Ⅰ・Ⅱ」は、地域政策科学専攻(博士後期課程)が開設されて以来、開講されている必修科目です。この授業では「プロジェクト研究Ⅰ」の受講生が統一テーマを設定し、それにもとづいて研究を進め、「プロジェクト研究Ⅱ」の受講生は前年度の経験も踏まえ適宜アドバイスをを行います。その成果を毎年の報告会で発表し、報告書を作成しています。

今年度は心理学、文学、観光学を専攻する合計4名の院生が報告者となりました。授業の実施形態は、昨年度に続き新型コロナウイルス感染症の感染対策の影響によりオンライン形式で行いました。また、フィールドワークを主たる研究手法としている院生は、報告の準備作業として海外に調査に赴き、現地より発表を行いました。その結果、オンライン授業の醍醐味として、受講者全員が海外の社会情勢・文化事情をリアルタイムで実感することができました。

今年度の統一テーマは「地域に眠る宝を活かして—『孤・個』の歩みから『共』につながる社会へ—」です。社会変容に伴う孤独、孤立の問題がますます深刻さを増す中、あらゆる領域のマイノリティに対しどのように向き合い「共」へと導けるのかという課題について、4人それぞれの専門分野から検討しました。またこれまで着目されることがなかった有形・無形の地域資源を、時間、空間を超えて異なる学問領域から開拓を試みました。

以下、簡単に報告内容を紹介していきます。前半の部ではまず黄秋実さんから「中国少数民族観光におけるホストとゲストに関する研究—土家族を事例として—」と題した報告がありました。本報告では中国湖北省彭家寨の土家族集落の調査を通し、観光開発が進む現地のホストとゲストの相互関係について論じました。つづいて前野明子さんから「『地域の親グループだからこそできる』親支援プログラム—地域に根ざした発達障害児の親支援の取り組み—」と題した報告がありました。

前野さんはこれまで発達障害児の保護者グループと専門家との協働による家族支援プログラムを企画立案してきましたが、本報告では保護者グループ主導で持続可能なプログラムを再検討しその効果と課題について論じました。

後半の部ではまず程若さんより「近世日本における中国笑話の受容—『笑府』の抄訳本を中心に—」と題した報告がありました。本報告では中国明末清初に編纂された笑話集『笑府』について、日本で江戸時代に刊行された抄訳本三種の笑話収録数、文体、内容の比較を行い、さらに小咄への改作に触れ、近世における中国笑話の受容の様相を明らかにしました。つづいて任軼さんからは「河口静斎の仮伝作品研究—「楮思問伝」と「相思君伝」を中心に—」と題した報告がありました。本報告では江戸中期の儒者、河口静斎による仮伝作品「楮思問伝」、「相思君伝」に着目し、韓愈の「毛穎伝」を模した作風や文中に見られる君主と臣下の主従関係の描写を、武家政権における静斎自身の社会的立場と関連付けて分析しました。

今回の報告会では、国内外を問わず地域に埋もれた人的資源、文化資源に光を当て、そこから人と人との繋がり、または分野横断的な繋がり、構築を試みました。様々な感染症が猛威を振るう中、受講者も少なからず影響を受け、研究活動が難航することもありましたが、困難を乗り越え完成した「プロジェクト研究」は貴重な体験であるといえます。大変な部分も多かったかと思いますが、この過程で得た経験は後に必ず生きてくると信じています。今後も引き続き研究に邁進されることをお祈りします。

三木 夏華 (みき なつか)

鹿児島大学法文学部人文学科准教授。大学院人文社会科学研究科地域政策科学専攻「東アジア言語文化論」担当。

目 次

巻頭文

今年度のプロジェクト研究について	三木 夏華	<i>i</i>
------------------	-------	----------

報告

中国少数民族観光におけるホストとゲストに関する研究 —土家族を事例として—	黄 秋実	1
「地域の親グループだからこそできる」親支援プログラム —地域に根ざした発達障害児の親支援の取り組み—	前野 明子	7
近世日本における中国笑話の受容 —『笑府』の抄訳本を中心に—	程 茗	17
河川静斎の仮伝体作品研究 —「楮思問伝」と「相思君伝」を中心に—	任 軼	27
プロジェクト研究報告会概要	江 山	35
プロジェクト研究を振り返って		38

中国少数民族観光におけるホストとゲストに関する研究

——土家族を事例として——

人文社会科学部 地域政策科学専攻 文化政策コース 1年
黄 秋実

1. 本研究におけるホストとゲストの概念

ホストとは「(お客さまをもてなす) 主人」とか「主催者」とかで、少数民族観光地で観光客を受け入れたり、接触したりする地域住民のことで、観光サービス業者や観光地の管理者などが含まれている。ゲストとは、(招かれてもてなしを受ける)客で、レクリエーション目的で通常の居住地から離れ、少数民族地域を訪れる人というふうに理解している。

本研究で調査を行った彭家寨という土家族村落では、少数民族の文化資源や人的資源を活かし、従来孤・個の社会を歩いてきたホストの生々しい生活の様子をゲストに展示しており、両者間の新しい交流方式と関係をもたらすだけでなく、「共」につながる社会へ…というテーマに繋がっているといえる。

2. 本研究の目的

本研究では、観光人類学における「ホストとゲスト」論から、土家族を事例とし、少数民族観光におけるホストとゲストの関係を明らかにし、少数民族観光におけるホストとゲストのあるべき姿や少数民族観光の行方を探ることを主たる課題とする。

3. 先行研究

観光人類学は1960年代に欧米で誕生した。1977年に、バレーン・L・スミスは『Hosts and Guests: The Anthropology of Tourism』初めて「観光人類学」という概念を提起した。論文集の焦点は主に2つの側面に分けられる。1つは観光客と観光の本質、もう1つは観光が観光地の国と地域に与える社会的および文化的影響である。スミスは少数民族観光という観光形

態のゲストの動機、観光活動内容とホストとゲストとの関係についても簡単に説明した。

そして、1999年にマキヤーネルは代表的な著書である『ザ・ツーリスト:高度近代社会の構造分析』において、ゲストの旅行の目的は日常生活から離れる新しい文化を体験することであると指摘し、新しい文化を追求する際に、「文化の真正性」というようなさまざまな問題がでてくると提示した。その後、多くの研究者が「演出された真正性」をめぐって研究し、議論してきた。

また、現代観光においては、「見せ物」という「表領域」だけではなく、神秘性を持った裏領域が存在する。この「表領域」と「裏領域」はゴフマン (Goffman) によって提起され、マキヤーネルがゴフマン (Goffman) の「表領域 (frontregion)」と「裏領域 (backregion)」を用いて「演出されたオーセンティシティ (staged authenticity)」概念を提示した。須藤はマキヤーネルの「演出されたオーセンティシティ」論を分かりやすくするために「表／裏領域」論と名付けたと「表領域」と「裏領域」の由来を解釈した。

中国において、合計353件の論文を収集して、整理を行った。353件のうち、論文のキーワードからみると、この表の通りで、「人類学」が最も多く42回出現し、次いで「旅游(観光)」が37回、第3位が「民族観光」で23回となっている。そして、研究の方向性からみると、次のようになる。この表からみると、ホストとゲストに関する研究も注目されている。しかし、従来の研究では、少数民族観光におけるホストとゲストに関する研究はまだ少ないと分かった。

私は少数民族観光の特徴を抽出し、観光行為の起点であるゲストの観光の目的から、ホストによるその行

為に対する対応、ホストとゲストの関係のあり方、両者の接触によってもたらした衝突および研究者たちが提出した解決方策などについて検討してみた。

まず、ゲストは少数民族文化という異文化に対する好奇心が湧いて、自然や文化景観、当地の特有の風俗や慣習を体験し、土着のホストと接触することを望み、漢族生活圏という日常生活から少数民族地域へ移動する。ホストは殺到するゲストを接待している間に、演技や周辺環境の再構築の重要性を意識し、自民族の境界・伝統文化を守りながら、自文化を取捨選択して再構築・創造するようになる。

このように、ホストとゲストは観光の場に集まり交流をし始めた。しかしながら、少数民族観光においては、少数民族地域の住民は、提供されるサービスとその提供方法についてコントロールできるものの、自分たちが後進的で弱者層の存在であると認識することが多い。そのため、少数民族観光におけるホストとゲストの関係には、摩擦や言葉の対立を特徴とする悪い関係と、消費の活性化やビジネスの拡大、地域住民の観光収入の増加などを特徴とする良い関係の構築という二つの傾向がある。

また、少数民族観光活動においては、民族の伝統と相反する状況が発生することがある。そのため、ホスト側が対立を解決するためにどのような手段をとるかということが重要だと言われている。最後に少数民族観光におけるホストとゲストの相互作用は、非金銭的互惠関係ではなく、義務や責務を組み込んだ場合に、

より親密なものになると論じられている。

4. 調査方法

今回は主に彭家寨という土家族村落で調査を行った。これまでにインタビュー調査 5 人、聞き取り調査 15 人、参与観察 3 組、写真とコメントの分析（写真 859 枚、コメント 100 本）を行った。

5. 調査結果

まずは調査地の基本状況として、50 世帯、300 人近く住んでおり、全員が土家族である。基本的に家ごとに彭(ほう)という姓を持っているが、別姓は 3 軒だけで、彭氏の子孫である。土家族の人々の生々しい生活の様子が再現され、展示されている。

筆者の調査データを組み合わせ、開発前と開発後の村を比較したところ、村の産業構造が第一次産業優位から第三次産業優位に大きく変化していることがわかった。しかし、代々農業に携わってきた地元の土家族は、農民の土地が政府に収用されたため、観光業に従事せざるを得なくなってしまった。また、ゲストの参入は地元にある程度の経済的収入をもたらしたが、観光会社と地元住民の関係がうまくいっていないため、観光産業によって地元住民の生活水準が大きく変化することはない。そして、聞き取り調査とゲストのコメントを分析したところ、ホストとゲストは村に対する印象・態度、ホストとゲストの身分の変化も見られる。

	昔	現在
産業	栽培業の稲、サツマイモ、トウモロコシ、ジャガイモが中心で、養殖業の豚、牛、羊、鶏、鴨が中心だった。	観光産業を中心に、農産品の販売や農家楽（グリーンツーリズム）をやっている人が多い。
人口構成	多くの若者たちが外に出稼ぎに行き、村に留守児童と老人が多かった。	大差はない。

表 1 村の産業（筆者作成）

村に対する態度・印象		
	開発する前	開発した後
ホスト	逃げる・恥ずかしい・貧困	戻る・期待している・自慢
ゲスト	知らない・閑静・原始的	猟奇・きれい・素朴的

表2 村に対する態度・印象 (筆者作成)

村に対する態度・印象		
	開発する前	開発した後
ホスト	住民・農民	ホスト・サービス提供者
ゲスト	外来者	ゲスト・消費者

表3 村民の身分の変化

そのようなコメントやゲストが投稿した写真からみると、ゲストのまなざしから、土家族観光におけるホストとゲストの関係の一端を垣間見える。例えば、ゲストは彭家寨の自然景観と人工景観の組み合わせに興味を持っている。そして、これらの写真のほとんどには、人間が写っていない。また、本研究で注目したホスト

とゲストのやりとりを撮影した写真は73枚しかない。ゲストのコメントの中の物象については、トップ3はすべて土家族に関する物象である。第4位から6位は、いずれも自然の風景である。これは、ゲストが地元の少数民族のシンボルを大切にし、写真という形で残していることを表している。

写真内容 (景観)

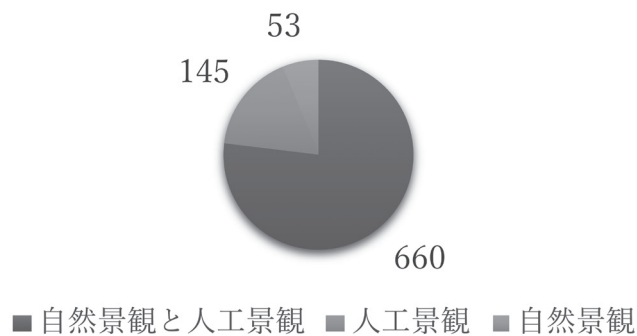


表5 写真内容 (景観) (筆者作成)

写真内容 (主体)

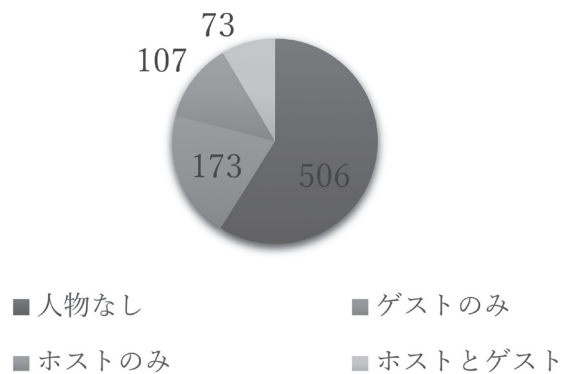


表4 写真内容 (主体) (筆者作成)

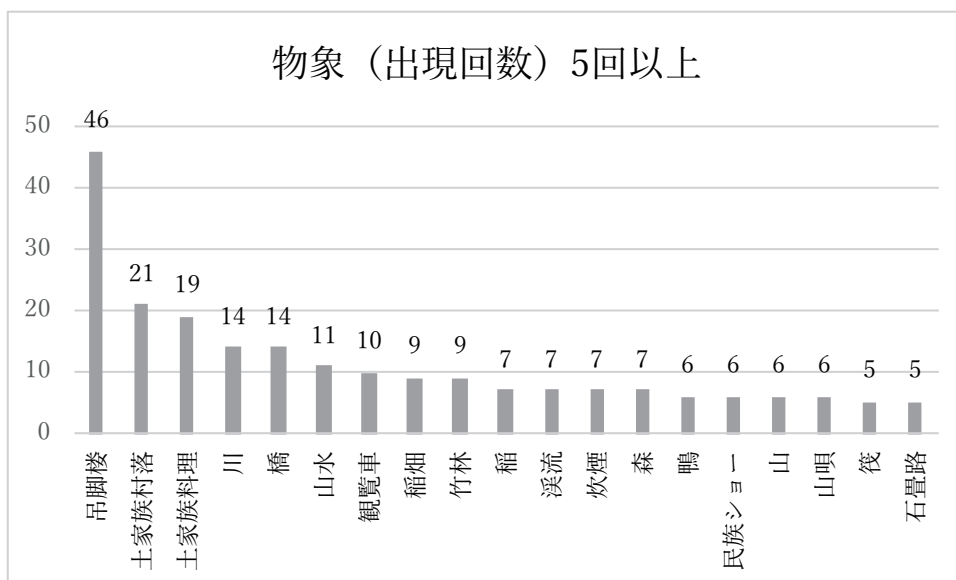


表 6 物象（出現回数）5回以上（筆者作成）

ホストの皆さんの話によって、観光開発された後、ホストは観光地土家族という身分より、農民としての生計を重視している。年配の方が多いので、観光客をゲスト（客）として扱い、おもてなしをする。しかし、料理の好みが違うなど、方言や生活習慣による衝突が生じることもある。

6. 調査結果

まずは中国における農村観光と少数民族観光からみる少数民族観光の真正性である。少数民族観光の真正性は難しい問題で、さまざまな視点から分析できる。今回の調査地の彭家寨は元々農村地域で、農業が主な産業だった。調査データからみると、ホストは当地の観光を農村観光として扱う人が多く、ゲストは土家族の記号、シンボルを重視している。そのため、農村観光と少数民族観光という視点から分析してみた。まずは観光動機、地域と主な活動内容からみると、農村観光と少数民族観光は異なっているが、中国の少数民族は古来よりもっと辺鄙な場所に住んでいたため、ほとんどが農業に従事している。彼らが正式に少数民族と認められたのは、中国の民族識別プロセスを経た後である。一方、土家族は漢化した民族で、漢民族と大きな違いはない。そのためホストの多くはここが農村地域で、観光活動も農村観光だと認識している。しかし、ゲストの目には、土家族の伝統的な建物である吊脚楼があることから、ここが正真正銘の土家族観光地であ

ると映っている。そのため、ホストもゲストも「ここは本物だ」と思っているが、彼らの目に映る現実は違う。

第2点目は表領域と裏領域からみる彭家寨の土家族民族観光である。彭家寨の商業街に入ると、川の向こうの畑とそこで働く人々と、土家族の要素・記号を取り入れて人工的に作られた街の様子の対比が際立ってきた。中国の他の少数民族観光地のように区切られているわけではない。ここでは、住民の生活圏が、ゲストの訪問圏になっている。

ホストの家にもいつでも行って、料理をしたり、子供とテレビを見たり、家事をしたりする姿も見ることができる。つまり、表領域と裏領域が区分されておらず、中間領域が一つもない。そのため、ここにはパフォーマンス領域がなく、ゲストが裏領域に入り込むための中間領域もない。このような状況では、ホストとゲストが互いに見知らぬ者同士であるため、なかなか対話が始まらないことが調査を通じてわかった。しかし、ひとたびコミュニケーションが始まれば、深い話もしやすく、多くのホストはこのようにして目を開いて、視野が広がって、多くの友人を作ることができるようになる。ゲストはその過程でより深い観光体験をすることができるようになる。

今後は、他の土家族観光地に対して調査し続け、より詳しい検討が必要である。

7. 参考文献

王茜

2008 「旅遊人類学視野下的四川節慶旅遊開發——以成都龍泉桃花節為例」『技術与市場』(12):120-121.

黃松

2004 「民族文化商品化与旅遊工芸品」『西南民族大学學報：人文社会科学版』(25)3:79-81.

吳忠軍；張瑾

2008 「民族旅遊開發中東道主間關係的人類学研究」『貴州民族研究』(28)6:62-69.

張曉萍，黃繼元

申葆嘉

1996 「国外旅游研究進展（連載之一）」『旅游學刊』(1):62-6779.

「国外旅游研究進展（連載之二）」『旅游學刊』(2):48-52.

「国外旅游研究進展（連載之四）」『旅游學刊』(4):46-50.

「国外旅游研究進展撰后記」『旅游學刊』(5):52-56.

石亮亮

2020 「人類学視野下的“旅遊真實”——以《中華泰山·封禪大典》大型山水实景演出為例」『泰山學院學報』(42)1:56-59.

宗曉蓮

2001 「西方旅遊人類学研究述評」『民族研究』(3):85-94.

孫九霞；保繼剛

2004 「社區參與的旅遊人類学研究——以西双版纳傣族園為例」『廣西民族學院學報：哲学社会科学版』(26)6:128-136.

趙紅梅

2003 「旅遊業的文化商品化与文化真實性」『雲南師範大學學報：哲学社会科学版』(35)3:132-136.

張曉萍

2002 「文化旅遊資源開發的人類学透視」『思想戰線』28(1):31-34.

2000 「納爾遜·格雷本的“旅游人類学”」『思想戰線』(2):47-50.

張曉萍；劉德鵬

2010 「人類学視野中的旅遊對目的地負面影響研究述評」『青海民族研究』(1):14-19.

陳興

2010 「“虛擬真實”原則指導下的旅遊體驗塑造研究——基于人類学視角」『旅遊學刊』(0)11:13-19.

鄭威；余秀忠

2007 「生態博物館旅遊与文化遺產保護」『改革与戰略』(9):116-118.

ディーン・マキアーネル

1999 The Tourist: A New Theory of the Leisure Class, University of California Press (=安村克己他訳(2012)『ザ・ツーリスト：高度近代社会の構造分析』, 学文社).

白楊

2006 「旅遊真實与遊客」『桂林旅遊高等專科學校學報』(17)3:277-280.

バレーン・L・スミス（編）

1991 Hosts and guests (=三村浩史監訳『観光・リゾート開發の人類学—ホスト&ゲスト論でみる地域文化の対応—』, 勁草書房).

李春霞

2012 「好客的東道主：旅遊人類学“主-客”範式反思」『廣西民族大學學報：哲学社会科学版』(34)5:23-28.

李祥福

2003 「文化人類学視野中的旅遊」『中央民族大學學報：哲学社会科学版』(30)2:61-64.

竜梅

2009 「人類学視野下的民族旅遊開發」『求索』(9):64-66.

楊兮

2021 「中国少数民族村寨旅遊研究的民族志典範——美国人類学家邱垂珍《旅遊的勝景》述評」『貴州師範學院學報』(37)7:40-45.

Theron A. Nunez

1963 Tourism, Tradition, and Acculturation: Weekendismo in a Mexican Village
Ethnology Vol. 2, No. 3 (Jul., 1963), pp. 347-352.

Goffman, A

1959 The Presentation of Self in Everyday Life, New York: Doubleday. (=1974, 石黒毅訳『行為と演技—日常生活における自己呈示』誠信書房.)

「地域の親グループだからこそできる」親支援プログラム

——地域に根ざした発達障害児の親支援の取り組み——

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 地域政策コース1年
前野 明子

1. はじめに

本研究のフィールドは、A地区で発達障害のある子どもの親の会として活動をしてきた「A地区発達障害支援ネットワークB（以下、親グループB）」である。本研究は、「自分たちの地域で学べる場が欲しい」との親グループBの願いが出発点となり、当事者である発達障害児の子育て経験者と専門家（公認心理師・臨床心理士）との協働により、地域の親グループで実施可能な親支援プログラムの開発・実践に取り組んだものである。

本研究の特徴は、「地域に根ざした活動を行っている発達障害児の親グループ」と「発達障害児の子育て経験者の知識や経験」を「地域に眠る宝」として積極的に活用したエンパワメントの視点に立つ親支援プログラムという点にある。地域の親グループにおけるプログラムの実践を通じて、子どもの発達に悩む親が「孤独」な子育てから「共」に歩む仲間とつながることや、多様な背景を持つ地域の人々が「共」につながるきっかけとなることが期待される。

2. 本研究の背景

2-1 発達障害とは

2004年の発達障害者支援法制定により、日本における発達障害児者への支援が本格的に始まった。発達障害者支援法では「発達障害」について、「自閉症、アスペルガー症候群その他の広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害その他これに類する脳機能の障害であってその症状が通常低年齢において発現するもの」と定めている（第2条第1項）。これらの障害の特性は、乳幼児期から養育者にとって「育てにくさ」

と感じられることが多いことから、子どもの特性に応じた本人への発達支援と同時に、養育を担う親が早期に支援を受けられることが重要である。

2-2 発達障害児の親支援における現状の課題

発達障害児の親支援に関する先行研究から、以下の2点の課題の存在を指摘することができる。1点目は、発達障害児の親支援における地域間格差である。発達障害児の親支援の方法として、ペアレントトレーニング（以下、PT）等の行動理論を基盤とした親支援プログラムは既に有効性が実証されているが（e.g.、山上、1998；津田・田中・高原・橋本、2012；杉原・米山、2017）、現状として専門機関での実践が中心であり、親にとって身近な地域での展開はまだ十分とは言えない（肥後・前野、2019）。特に、専門機関にアクセスしづらい地方においても親が必要なタイミングで支援を受けるためには、当該地域の実情に合った資源開発が必要となる。このことから、発達障害児の親支援の方法として、既に地域に存在する人的資源の「強み」を活かした親支援プログラムの開発と実践の必要性は高いといえる。2点目は、専門家主導による支援モデルからの転換である。発達障害児の家族支援について野田（2008）は、専門家が家族に対して一方的に支援を提供するという従来の医療モデルに基づく支援ではなく、“子供の一番身近な援助者”である家族が持つ力を信じ、その力を高めていく支援の必要性を指摘している。このことから、当事者との協働によるエンパワメントの視点に立つ親支援の展開が求められると言える。

2-3 エンパワメントとは

エンパワメント (empowerment) は、「力をつけること」、「権限の委譲」と和訳される (参照：大辞林第四版)。現在、教育、保健福祉、ビジネスなど様々な分野で用いられているが、社会開発分野では「人間を尊重し、すべての人間の潜在能力を信じ、その潜在能力の発揮を可能にするような平等で公平な社会を実現しようとする活動」と定義されている (安梅、2015)。

また、安梅 (2004) は、当事者主体の立場に立つエンパワメントについて「セルフ・エンパワメント：当事者自らが力を発揮するもの」、「ピア・エンパワメント：仲間 (ピア) 同士、グループが力を発揮するもの」、「コミュニティ・エンパワメント：コミュニティ、地域社会、社会システムが力を発揮するもの」の3種類があるとし、これらを組み合わせて活用することが、継続的で効果的なエンパワメントの実現に必須であると述べている (安梅、2021)。

2-4 本研究の目的

本研究の目的は、以下の2点である。1点目は、発達障害児の親支援における地域間格差の解決に向けて、地域の発達障害児の親グループで実施可能な行動理論に基づく親支援プログラムの開発と実践を行うことである。2点目は、専門家主導による支援モデルからの転換として、発達障害のある子どもの子育て経験者が持つ知識や経験を積極的に活用したエンパワメントの視点に立つ親支援プログラムの開発と実践を行う

ことである。このうち、今回のプロジェクト研究では「親支援プログラムを通じた当事者のエンパワメント」について検討した内容を中心に報告を行う。

3. 親支援プログラムの実践内容

3-1 A地区における親グループBとの協働による親支援プログラムの取り組み

親グループBとの協働による親支援の取り組みとして、2018年、2019年の2年間は、既存のペアレントトレーニング (肥後、2016；前野・肥後、2021；前野・肥後、2022) をベースにしたプログラムを2クール実施した。そして、その実践を踏まえて、より地域の親グループで実施しやすいプログラムとして、親グループBのメンバーの意見を取り入れながらプログラムを再構成し、2021年、2022年に2クール実践した。

3-2 プログラム内容と実施形態

本研究の親支援プログラムのプログラム内容と実施形態を表1に示した。本プログラムでは講義を通じた学習やグループワークの効果を高める目的で、全5回のセッションへの継続参加を基本として募集を行った。また、5回のセッション終了後にフォローアップセッションを2回実施した。2クールともすべて対面で実施予定であったが、新型コロナウイルス感染症対策として、一部オンラインで実施した。

表1 プログラム内容とプログラムの実施形態

回数	テーマ	1クール目の実施形態	2クール目の実施形態
第1回	なるほど！ 子どもの行動を理解するコツ！	対面	対面
第2回	コツをつかんでほめ上手♪	対面	オンライン (zoom)
第3回	ちょっと見方を変えてみると…	対面	オンライン (zoom)
第4回	問題の解き方はいろいろ	対面・オンライン (zoom) 併用	オンライン (zoom)
第5回	子どもも 私も ちょっとずつ成長していく	オンライン (zoom)	対面・オンライン (zoom) 併用
フォローアップ 第1回	みんなで ちょっと ほっと一息①	オンライン (zoom)	対面・オンライン (zoom) 併用
フォローアップ 第2回	みんなで ちょっと ほっと一息②	対面	対面・オンライン (zoom) 併用

3-3 プログラムの構成

本研究の親支援プログラムは、4つのコンテンツで構成された（表2）。具体的には、本プログラムの「講義」は行動理論に基づく子どもの行動理解と対応について学ぶものであったが、特に「子どもの行動への肯定的注目」に主眼を置いた。参加者は、講義で学んだことをそれぞれの家庭での子どもとの関わりの中で実践した。また、「グループワーク（お助けワーク）」は、発達障害児の子育て経験者の知恵や経験を積極的に活用する狙いがあり、子育て経験の浅い未就学児の親（2～3名）と発達障害児の子育て経験者が一つのグループで、参加者相互の子育て上の問題解決に取り組んだ。この他に、「コミュニケーションワーク」に

よる「日常生活における些細な良い出来事への注目」、「他者の肯定的な側面への積極的な注目と言語化」、「他者から褒められる体験」、そして「リラクゼーションワーク」による日常生活に取り入れられる簡単なリラクゼーション法の体験ができる構成とした。また、本プログラムにおける専門家と当事者の役割分担は、専門家が全体のファシリテーターとして「講義」、「コミュニケーションワーク」、「リラクゼーションワーク」を担当し、子育て経験者が「お助けワーク（問題解決ワーク）」の各グループのファシリテーターとして、グループの進行と参加者相互の問題解決のためのアイデアの提供を行った。

表2 親支援プログラムの構成

コンテンツ	ねらい	内 容
講義	・子どもの行動への肯定的注目の増加と対応の変化	・行動理論に基づく行動理解と対応の学習・家庭での実践 ・「ほめるコツ（肯定的注目）」の学習・家庭での実践
グループワーク （お助けワーク）	・子育て経験者の知恵や経験を積極的に活用	・未就学児の母親（2～3名）と発達障害児の子育て経験者で構成されるグループワーク ・参加者相互の子育て上の問題解決に取り組む
コミュニケーションワーク	・日常生活における些細な良い出来事への注目 ・他者の肯定的な側面への積極的な注目と言語化 ・他者からほめられる体験	・「そういえば こんないいことありました」ペアで最近の些細な良かったことを報告する ・「それって 素晴らしいと思います！」ペアで相手の話を聴きながら良いと思う点を積極的に見つけて伝える
リラクゼーションワーク	・日常的に手軽に取り入れられるリラクゼーション法の体験	・腹式呼吸法 ・漸進的筋弛緩法

3-4 プログラムの評価方法

本研究の親支援プログラムの評価は、以下の6つの方法で行った（表3）。

表3 親支援プログラムの評価方法

	評価方法	実施時期	目的
①	養育スタイル尺度（松岡他,2011）	事前・事後	プログラム効果の評価
②	育児に対する自己効力感尺度（金岡,2011）	事前・事後	プログラム効果の評価
③	BDI- II （抑うつ症状の重症度評価）	事前・事後	プログラム効果の評価
④	事後アンケート	事後	プログラム効果の評価 個別の変化
⑤	任意の最終レポート	事後	参加者の取り組み内容と個別の変化
⑥	インタビュー調査	事後	プログラム継続参加による変化・親グループへの思いなど

本研究の親支援プログラムの効果については、1クール目実施後の①「養育スタイル尺度」の分析結果より、参加者の養育スタイルのうち、「叱責」がプログラム参加後に有意に減少し、「相談・つきそい」が増加する傾向が認められた。また、③「BDI-II」の分析結果より、参加者の抑うつ症状の有意な減少が認められた。このことから、本研究の親支援プログラムは、他の親支援プログラム同様に「専門性のある親支援プログラム」であることが確認された（前野、2022a）。

また、1クール目実施後の④「事後アンケート」の分析結果より、参加者が4つのコンテンツを通じて「行動」・「認知」・「感情」の変化を経験していることが示された。特に、グループワークにおいて「共感と安心」、「知恵の共有と問題解決」を経験していることが示された。このことから、本研究の親支援プログラムは、「専門性」と「相互援助性」を両立するプログラムであることが確認された（前野、2022b）。

以上の結果については、先行論文で報告済みであることから、今回のプロジェクト研究では、2クール目実施後の⑥「インタビュー調査」の分析結果の一部について報告を行う。

尚、倫理的配慮として、本研究は、志學館大学人対象研究倫理委員会の承認を受けた上で遂行した。参加者に対しては、研究目的、内容について書面及び口頭にて説明を行い、書面にて同意を得た。

4. 2クール目実施後のインタビュー調査から

4-1 インタビュー調査協力者

インタビュー調査は、親支援プログラム1クール目と2クール目の継続参加者（以下、継続参加者）2名、ファシリテーターを務めた発達障害児の子育て経験者（以下、子育て経験者）2名の合計4名の協力を得て実施した。協力者の属性は以下の通りである（表4）。インタビュー調査は、半構造化面接により、個別に実施した。

表4 インタビュー調査協力者の属性

Aさん	親支援プログラム2年参加。A地区外に在住。
Bさん	ペアレントトレーニング2年、親支援プログラム2年参加。A地区在住 親支援プログラム2年目は、プログラム運営にも参加。
Cさん	発達障害児の子育て経験者。A地区在住。 親グループBの立ち上げメンバー。
Dさん	発達障害児の子育て経験者。A地区在住。 親グループBの立ち上げメンバー。

4-2 質問内容と分析法

継続参加者および子育て経験者への質問内容は表5の通りである。継続参加者への主な質問内容は、①プログラム参加を通じた自身と子どもの変化について、②本プログラムの特徴や他の研修プログラムとの違い、③親グループにおいてプログラムを継続していることへの考えについてであった。子育て経験者への主な質問内容は、①プログラムを通じて自身の経験が活かされたと感じたこと、②プログラムを通じた自身の変化、③プログラムに関する将来の展望についてで

あった。

また、インタビューの記録方法は、対象者の同意を得てICレコーダーおよびビデオカメラを用いて記録を行った。インタビュー終了後、主にICレコーダーの記録データを基に逐語録の作成を行った。4人の調査協力者の逐語録について、本親支援プログラムにおける当事者のエンパワメントについて明らかにする目的で、「セルフ・エンパワメント」、「ピア・エンパワメント」、「コミュニティ・エンパワメント」の3つのエンパワメントの視点から整理を行った。

表5 インタビュー調査における質問内容

継続参加者への質問内容	子育て経験者への質問内容
①プログラムに参加した感想 ②子供の行動や親子関係の変化 ③自分の子育てに対する気持ちの変化 ④このプログラムのいいところ ⑤親グループでプログラムを継続していることについての考え など	①プログラムを終えた感想 ②プログラムを通じて自分のこれまでの工夫や経験が生かされたと感じたこと ③プログラムを通じた自分の変化 ④このプログラムが今後どのような形になればよいと思うか。 など

4-3 インタビュー結果

①セルフ・エンパワメントの視点から

継続参加者の回答について、セルフ・エンパワメントの視点から整理を行った。その結果、参加者は親支援プログラムに参加し、子どもの行動理解や子どもの肯定的な行動への注目の方法を学び、子どもとのかかわりにおいて実践することで【子育ての肯定的変化】が生じ、そのことが親自身のセルフ・エンパワメントにつながったことが示唆された（図1）。具体的には、プログラム参加により参加者には、「子供ができないことより、できていることに目を向けるようになった」

た」、「自分の対応が変わると子供の行動が変化することに気づいた」など、【プログラム参加による子供を見る視点と関わり方の変化】が生じていた。その結果、「子供の激しいかんしゃくがなくなった」、「『私のことをわかってくれてありがとう』と言うようになった」など、【子どもの行動の変化】が認められた。そして、「参加前は、この子とはもう向き合えないと思っていたが、今は一緒にいることが楽しいと思えるようになった」など【親子関係の再構築】が起こっていた。このような【子育ての肯定的変化】が参加者自身のセルフ・エンパワメントにつながったと考えられる。

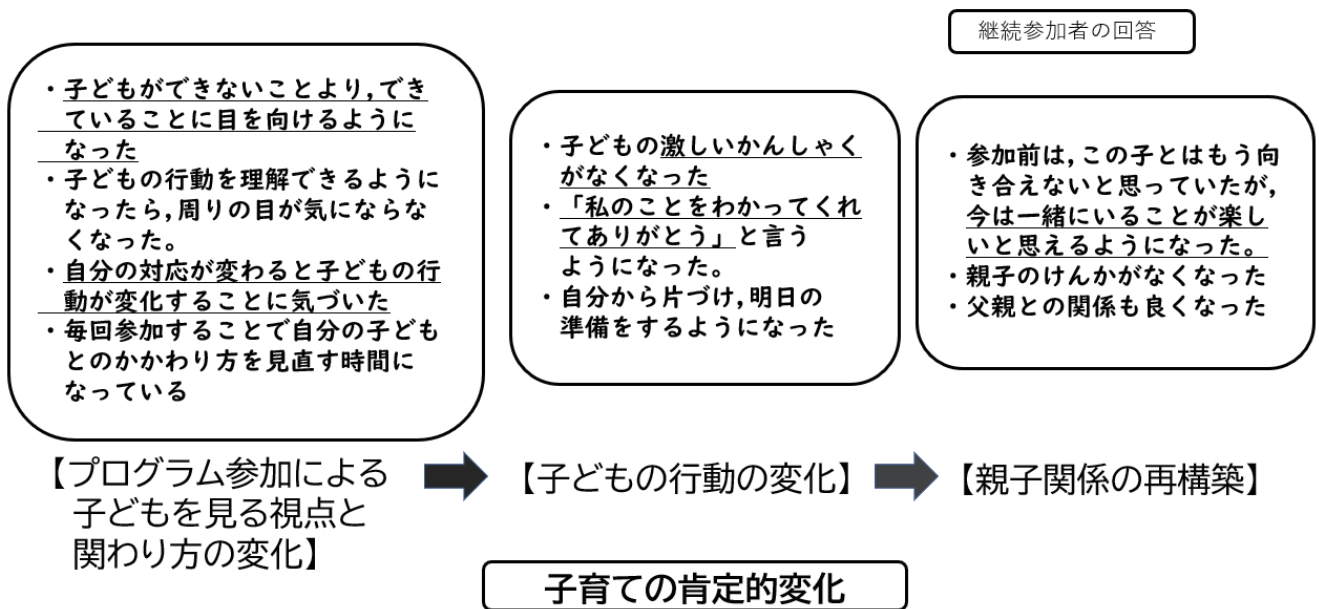


図1 本研究の親支援プログラムにおけるセルフ・エンパワメントの内容

②ピア・エンパワメントの視点から

継続参加者および子育て経験者の回答について、ピア・エンパワメントの視点から整理を行った。その結果、本研究の親支援プログラムには、同年代の子

どもの発達に悩む【仲間の存在】と、子どもが成長した【子育て経験者の力】が存在し、これらのいわば【ヨコとタテの相互作用】によりピア・エンパワメントが生じることが示唆された（図2）。具体的には、

継続参加者の回答から「仲間がいて、先輩がいたおかげで取り組めた。一人では無理だった」など、＜同じ立場の仲間がいるからできること＞の存在が示された。一方、子育て経験者の回答からは「同じような悩みを抱えるヨコの関係と、数年前にそこを過ぎ去った自分たちがいるのがよいのかも。ヨコとタテ」など、本プログラムには＜ヨコとタテの存在＞があり、そのことを肯定的にとらえていることが示された。このような【仲間の存在】により本プログラムにおけるピア・エンパワメントが生じたと考えられる。

また、【子育て経験者の力】については、継続参加者の回答から「先の見通しが持てるようになった」など、同じ発達障害児を育てる先輩として＜子育て経験

者だからこそ得られるもの＞の存在が窺えた。加えて、子育て経験者の回答からは「自分の経験を伝えることで『あなただけじゃないよ』、『こんな未来があるよって』と伝えられたら。時間が経ったからこそできる」、「自分も先のことが分からなかった。失敗談や上手くいったという実体験を、自分だけに限らず、他のファシリテーターの体験も聞ける」といった＜子育て経験者だからこそできること＞の存在が示された。本親支援プログラムにおいては、このような、同年代の子どもを持つ【仲間の存在】と、子どもが成長した【子育て経験者の力】による、いわば【ヨコとタテの相互作用】の存在がピア・エンパワメントにつながったと考えられる。

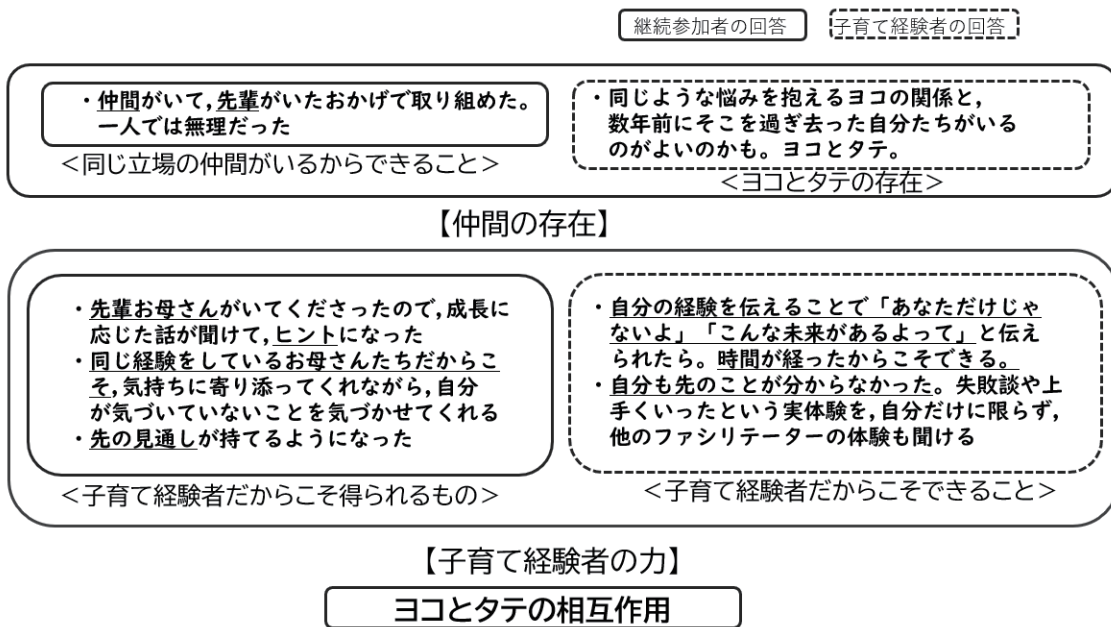


図2 本研究の親支援プログラムにおけるピア・エンパワメントの内容

③コミュニティ・エンパワメントの視点から

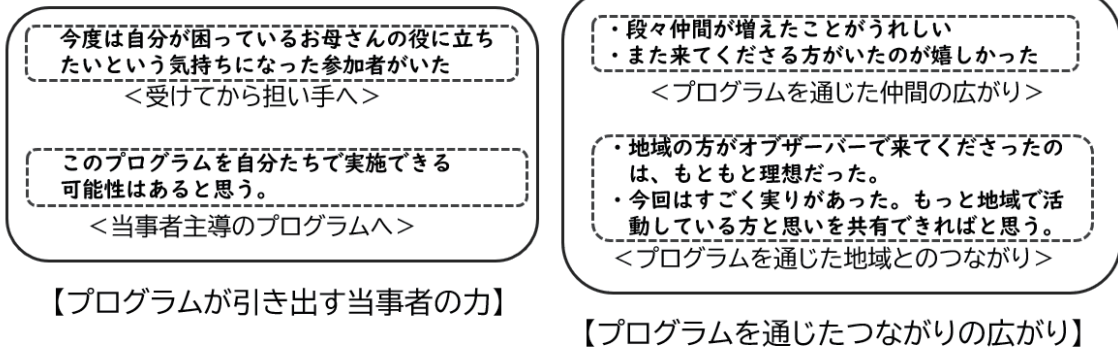
子育て経験者の回答について、コミュニティ・エンパワメントの視点から整理を行った。その結果、本研究の親支援プログラムには、【プログラムが引き出す当事者の力】と【プログラムを通じたつながりの広がり】が存在し、これらを通じて【個々の力が活かされる場／孤立からともにつながる地域へ】といったコミュニティ・エンパワメントが生じることが示唆された(図3)。具体的には、「今度は自分が困っているお母さんの役に立ちたいという気持ちになった参加者がいた」など、＜受けてから担い手へ＞といった変

化や、「このプログラムを自分たちで実施できる可能性はあると思う」といった＜当事者主導のプログラムへ＞発展する可能性が示唆された。このような【プログラムが引き出す当事者の力】の存在が、発達障害児の親グループという、いわば当事者のコミュニティのエンパワメントにつながっていると考えられる。また、「段々仲間が増えたことがうれしい。また来てくださる方がいたのが嬉しかった」など、＜プログラムを通じた仲間の広がり＞や、「地域の方がオブザーバーで来てくださったのは、もともと理想だった」、「今回はすごく実りがあった。もっと地域で活動している方

と思いを共有できればと思う」など、＜プログラムを通じた地域とのつながり＞が生じ、このような【プログラムを通じたつながりの広がり】も親グループや親

グループが活動する地域のエンパワメント、すなわちコミュニティ・エンパワメントにつながっていると考える。

子育て経験者の回答



個々の力が活かされる場/ 孤立からともにつながる地域へ

図3 本研究の親支援プログラムにおけるコミュニティ・エンパワメントの内容

5. 考察とまとめ

5-1 「地域の親グループだからこそできる」親支援プログラムとは

「地域の親グループだからこそできる」親支援プログラムとは、同年齢の子どもを持つ親同士のつながりである「ヨコのつながり」と、発達障害児の子育て経験者とのつながりである「タテのつながり」の相乗効果が生まれるプログラムであると言える(図4)。同年齢の子どもを持つ親同士の「ヨコのつながり」には、＜経験に基づく共感＞と＜仲間がいる安心感＞があり、発達障害児の子育て経験者との「タテのつながり」には＜経験に基づく共感＞、＜発達障害児の子育ての知識や経験に基づく助言＞、＜将来への見通し＞があ

る。本研究の親支援プログラムは、これらの相乗効果により参加者のエンパワメントが可能となるプログラムであると考ええる。

また、もう一つの視点として、「地域の親グループだからこそできる」親支援プログラムとは、当事者が持つ力を積極的に活用することで、将来的に当事者主導で実施可能となるプログラムであると言える。これは、一般的な親支援は、「専門家主導のプログラム」であり、この場合専門家はリードする立場になる。このような専門家主導のプログラムが充実することはもちろん重要である。しかしながら、専門家が身近な地域にいないければ、発達障害児の親は利用しづらい状況に置かれる。本研究の出発点は、親グループBのメ

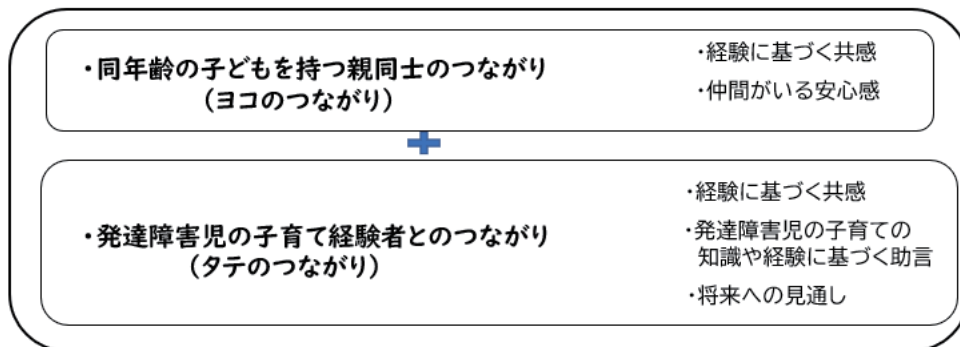


図4 本研究の親支援プログラムにおけるヨコとタテのつながり

ンバーの「自分たちの地域で学べる場が欲しい」との思いにあった。この思いを実現する方法として、「専門家と当事者の協働によるプログラム」の開発・実践に取り組んだ。このプログラムでは、専門家と当事者で役割分担を行い、当事者が持つ強みを活かすことで参加者のエンパワメントにつながるプログラムとなったと考える。また、当事者が持つ力を積極的に活用し、地域の親グループで実施しやすい内容のプログラムであるからこそ、継続的な実施により「当事者の力で実施可能なプログラムへ」と将来的に発展する可能性が示された。この場合、専門家はサポート役となり、中心的関わりから側面からサポートする役割へとシフトしていく。このような地域の中で継続的な実施が可能となるのも、地域の親グループの強みであると言える。

5-2 地域に根ざした発達障害児の親支援

地域に根ざした発達障害児の親支援とは、地域の親グループにおける親支援プログラムの実施を通じて

「地域内のつながり」と「地域を超えた発達障害児の親のつながり」が生まれる支援であると言える(図5)。今回の実践では、地域で活動する親グループBでの親支援プログラムにより、A地区で子どもの発達に悩んでいる親が親グループBとつながった。また、親グループBが地域内で活動を継続し、プログラム実施の際に地域の子育てサークルにも案内を行ったことで、2クール目にはサークル主催者のオブザーバーとしての参加があった。これらは取り組みを通じて生じた「A地区内のつながり」と言えるであろう。また、今回のプログラムには、A地区外からも子どもの発達に悩んでいる親の参加があった。

このように地域の親グループで親支援プログラムを実践することにより、「地域を超えた発達障害児の親のつながり」が生じることも、地域に根ざした発達障害児の親支援の特徴であると言えるであろう。そして、親支援プログラムには、このつながりの「結び目」としての機能があると考えられる。

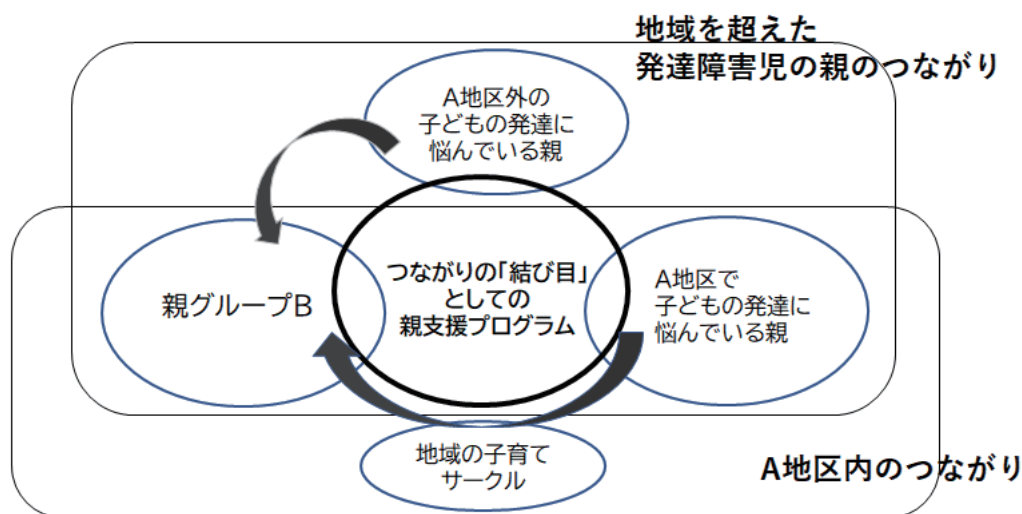


図5 本研究の親支援プログラムを通じて形成されるつながり

5-3 親支援プログラムを通じた当事者のエンパワメント

「地域の親グループだからこそできる」親支援プログラムとは、当事者が持つ力を引き出し、個人・親グループ・地域という3つのエンパワメントが生じるプログラムであると言える。個人のエンパワメントである「セルフ・エンパワメント」は、親支援プログラム参加を通じた参加者の子育てに肯定的変化するよって生じる。また、参加者相互の「ピア・エンパワメント」は、本研究の親支

援プログラムの特徴である同年齢の子どもを持つ仲間とのヨコのつながりと、子育て経験者とのタテのつながりの相互作用により生じる。そして、親グループや地域のエンパワメントである「コミュニティ・エンパワメント」は、親支援プログラムが個々の力が活かされる場となること、プログラム実施を通じた地域内外のつながりにより、参加者が孤立した状態からともにつながる地域へと変化することで生じていると考える。

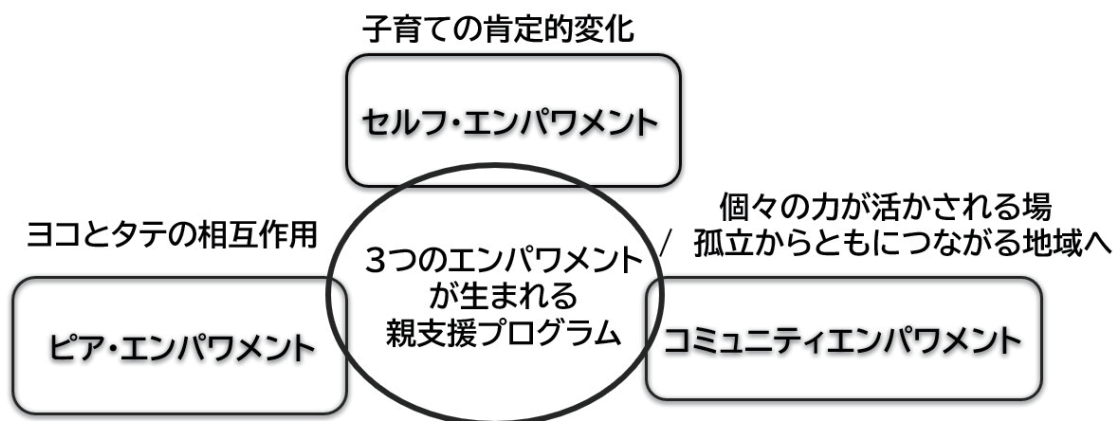


図6 本研究の親支援プログラムを通じた当事者のエンパワメント

5-4 親支援プログラムを通じたつながりの可能性

本研究の親支援プログラムを通じたつながりの可能性として、地域における「次の世代」へのつながりや、地域における支援の輪の広がり、そして他の地域で活動する親グループとのつながりのなどが考えられる。

親グループBにおいて親支援プログラムを継続的に実施することで「参加者」の立場から「ファシリテーター」として運営に加わる「次の世代」の仲間が増えた。そして、2クール目には地域の子育てサークル主催者のオブザーバーとしての参加もあった。

このような地域における「次の世代」へのつながりや、地域における支援の輪の広がり、これまで地域で活動を続けてきた親グループBの願いでもある。

また、今回プログラムの一部をオンラインで実施したことから、今後は他地域で活動する発達障害児の親グループとのつながりが生まれる可能性も考えられる。

今回のプロジェクト研究では、インタビュー調査の結果について「親支援プログラムを通じた当事者のエンパワメント」の視点から整理を行った。今後は、2クール目に実施した質問紙調査、アンケート調査、インタビュー調査の分析を進めることで、当事者のエンパワメントの視点に立つ発達障害児の親支援プログラムとして完成を図る予定である。また、親支援プログラムが地域に根ざすために必要なことや、他地域に展開するための方法について検討していく必要があるだろう。

謝辞

本研究の親支援プログラムに共に取り組んで下さったA地区発達支援ネットワークBの皆さん、そして参加して下さいました皆様に心より感謝申し上げます。

このプログラムを通じて、日々子育てに奮闘している親御さん、子どもたち、そして地域の皆さんにたくさんの笑顔が広がることを心から願っております。

本研究はJSPS科学研究費20K22159の助成を受けたものです。

引用文献一覧

- 安梅勅江 (2004) エンパワメントのケア科学 当事者主体チームワーク・ケアの技法. 医歯薬出版株式会社.
- 安梅勅江 (2014) いのちの輝きに寄り添うエンパワメント科学: だれもが主人公 新しい共生のかたち. 北大路書房.
- 安梅勅江 (2021) エンパワメントの理論と技術に基づく共創型アクションリサーチ - 持続可能な社会の実現に向けて -. 北大路書房.
- 肥後祥治 (2016) 行動分析保護者ワークショップ「どんどん、のびろ」資料集. 平成23～26年度科学研究費助成事業科学研究費補助金(基盤研究(B))「地域療育及び特別支援教育体制構築にむけた新パラダイムの提案に関する実践的研究」成果報告書別冊.
- 肥後祥治・前野明子 (2019) 発達障害児の保護者へのペアレントトレーニング実施の日本における現状と課題 ―地域における実践とスタッフ養成の視点から―. 鹿児島大学教育学部研究紀要, 71, 89 - 99.

金岡緑(2011) 育児に対する自己効力感尺度 (Parenting Self-efficacy Scale:PSE 尺度) の開発とその信頼性・妥当性の検討. 小児保健研究,70 (1) ,27-38.

前野明子 (2022a) 発達障害児の親グループと専門家との協働による親支援プログラムの効果と課題の検討 (第一報) - 「子どもと自分のいいところ発見プログラム」 -. 志學館大学人間関係学部研究紀要, 41,17-32.

前野明子 (2022b) 地域に根ざしたりハビリテーション (CBR) の視点に立つ発達障害児の親支援—当事者と専門家との協働による親支援プログラムの開発と実践—. 志學館大学 40 周年記念館学術研究発表会報告書, 26-31.

前野明子・肥後祥治 (2021) . 発達障害児の親グループと専門家との協働によるペアレントトレーニングの実践①—ペアレントトレーニング参加経験者をファシリテーターとしたプログラムの有効性の検討—. 日本発達障害学会第 56 回研究大会』ポスター発表 P-1.

前野明子・肥後祥治 (2022) 発達障害児の親グループと専門家との協働によるペアレントトレーニングの実践②— ペアレントトレーニング参加経験者をファシリテーターとしたプログラムの有効性の検討—. 日本発達障害学会第 57 回研究大会』ポスター発表 P-21.

松岡弥玲・岡田涼・谷伊織・大西将史・中島俊思・辻井正次 (2011) 養育スタイル尺度の作成：発達の变化と ADHD 傾向との関連から. 発達心理学研究,22 (2) ,179-188.

野田香織 (2008) 広汎性発達障害児の家族支援研究の展望. 東京大学大学院教育学研究科紀要,48, 221-227.

杉原聡子・米山直樹 (2017) 目標行動選定用シートを用いた短縮版ペアレント・トレーニングの試み. 人文論究, 67 (1), 43-60, 2017-5.

津田芳見・田中美沙・高原光恵・橋本俊顕 (2012) 高機能広汎性発達障害幼児とその親へのペアレントトレーニングによる効果の検討. 小児保健研究, 71 (1), 17-23.

山上敏子 (1998) 発達障害児を育てる人のための親訓練プログラム—お母さんの学習室—. 二瓶社.

近世日本における中国笑話の受容

——『笑府』の抄訳本を中心に——

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 文化政策コース3年
程 著

1. はじめに

中日両国における笑話の交流の歴史は非常に長い。中国における最初の笑話集は三国時代・魏の儒学者邯鄲淳によって編纂された『笑林』まで遡ることができるが、特に明清時代の俗文学としての笑話集『笑府』『(新鐫)笑林広記』などが日本に伝わって以降、日本の笑話集の創作に大きな影響を与えた。日本の江戸時代には、漢文笑話集の和刻本、抄訳本、翻案本が数多く刊行され、広く読まれた。日本には「所変われば品変わる」という諺がある。すなわち、風土によって育つ文化は異なることを意味する。中日両国の漢文笑話集には共通する部分が多いという可能性もあるが、実際には日本の漢文笑話は日本独自の特長を持つのではないだろうか。本研究の対象である『笑府』は中国・明の馮夢竜によって編纂されたものであり、600則の笑話を収録し、中国笑話集の代表的作品と言える。また、近世日本においては、明和5年(1768)から翌年にかけて『笑府』の抄訳本三種が相次いで出版されている。本稿は、『笑府』の原本と抄訳本・咄本の比較を通じて、漢文笑話の受容状況と両者の異同を解明するのである。

1.1 先行研究

石崎又造(1940)は日本笑話の歴史と、日本近世の中国笑話の展開について詳しく述べている。また、同氏は日本笑話を、元和元年至寛延末年(京坂風一古笑話時代)、宝暦元年以後(漢文笑話時代)、安永以後(江戸笑話黄金時代)という三つの段階に分けた。氏の研究によると、江戸時代に渡来した中国笑話は、『開巻一笑』、『応謔録』や『笑府』などがあるということ

である。¹森銑三(1946)は、石崎氏の時代区分を受け継ぎ、上代の『古事記』から江戸時代の『東海道中膝栗毛』まで、古典文学における滑稽な物語に歴史的な研究を行う。また、武藤禎夫(1965)は江戸時代の日本笑話の展開及び中国笑話との関連性を論述している。さらに、長島平洋(2002)は明清笑話と西洋笑話が日本笑話に翻訳・翻案で受容されていたことについて具体的に考察した。本研究は以上の先行研究を踏まえ、近世日本の漢文笑話はどのように中国笑話を受容したのかをめぐって、日中笑話の関連性という角度から『笑府』を中心に論じる。

1.2 研究方法と目的

研究方法は、主に統計法と比較法という二つの方法で『笑府』及びその抄訳本三種に研究を行う。まず、原本と抄訳本三種の概要および笑話の収録数を表にまとめ、書籍間の収録傾向と出典を検討する。次に、抄訳本『笑府』の本文の訓のつけ方に基づいて分類し、抄訳本の作者が白話語彙を取り扱う方策を考察する。それから、抄訳本・咄本の文体的な異同を比較して、日本における『笑府』の受容過程を推測する。最後に、『笑府』を翻訳・翻案する過程において、いかなる笑話の筋や内容がそのままに残されるか、または改作されるか、その方策についても検討する。これによって『笑府』の笑話を中心として漢文笑話の受容状況と両者の異同を解明するものである。

¹ 石崎又造(1940)『近世日本に於ける支那俗語文學史』清水弘文堂書房 p.331-324

2. 『笑府』 原本と抄訳本の概観について

2.1 『笑府』 原本の概観について

本文の分析に入る前に、まずは『笑府』の底本について検討したい。『笑府』はすでに中国で散逸したが、日本の国立公文書館の内閣文庫には、『笑府』の和刻本が残されている。²これは現在入手可能な『笑府』の最も完全なバージョンであると言える。本稿は、内閣文庫の和刻本『笑府』の影印本『馮夢龍全集笑府』³を検討対象とする。

『笑府』の概要について紹介する。『笑府』は明朝末期に文学者の馮夢龍が編纂した笑話集である。600則の笑話を収録した『笑府』は、笑話の題材によって、古艶(官吏・大尽)、腐流(書生・儒学者)、世諱(貧乏人)、方術(医者・易者)、廣萃(僧侶・様々な職業)、殊稟(変な趣味・癖)、細娛(のらくら者)、刺俗(不良な風習)、閨風(女性)、形體(体に障害がある人)、謬誤(失言・誤解)、日用(生活用品)、閨語(雑の部)という十三部に分かれている。一卷に一部で、合計十三巻からなっている。笑話は主に、先行する笑話集や、世間で知られている古い笑話、馮夢龍自身が聞いた民話などから抜粋したものである。『笑府』には、墨憨齋主人題の序文と、各部の文頭にその部のタイトルに応じた詳しい説明もあり、一部の笑話の文末に著者の評論もある。

2.2 『笑府』 抄訳本三種について

『笑府』が日本に初めて伝わった時期を明確にするのは難しいが、大庭修(1984)の調査によると、江戸時代に長崎港から輸入された漢籍の目録を記した『船舶書目』には、『笑府』や『笑林広記』などの笑話集の書名が見つかっているということである。⁴また、武藤禎夫氏(1970)によると、『笑府』は江戸時代に日本に輸入して以降、明和5年(1768)から翌年にかけて抄訳本『笑府』が次々と刊行された。この『笑府』抄訳本三種を概観すると以下ようになる。

² 注:内閣文庫の漢籍の子の部による蔵本(『笑府』、馮夢竜(清)、四冊、十三巻、刊本(清)、豊後佐伯藩主毛利高標献上本。)

³ 魏同賢(1993)『馮夢龍全集笑府』上海古籍出版社

⁴ 大庭修(1984)『江戸時代における中国文化受容の研究』角川書店 p.256-289

A. 大本『笑府』

明和五年九月刊。大本で、原序一丁、本文三五丁(上一九丁、下一六丁)・一七六話所収。腐流・方術・殊稟・刺俗・形体・謬誤・閨風・雑語(原本にはこの部なし。雑の部の意味で、他の五部から抄出)の八部に分類、一三部全編から選択している。最終丁裏に九語の註を付している。⁵

B. 小本『笑府』

明和五年一〇月刊。墨憨齋主人編・懋愷齋主人訳。小本で、題二丁、原序二丁、目録一丁、本文四五丁、八〇話所収。巻一として古艶・腐流・世諱、巻二として、方術・広萃の原本五部から抄出。国訳を後に添記してある。一卷ずつ出た元板を合冊したもので、これを前編とし、奥付には第六部以降の「笑府後篇近刊」の予告が見えるが、刊行されなかったようである。明和五年一〇月は、元板の一冊目が出た刊年と思われる。⁶

C. 『刪笑府』

明和六年序清・墨憨齋主人原編、日本・風来山人刪訳。大本で、序二丁、本文一八丁、七〇話所収。古艶・腐流・世諱・広萃の四部を除く原本の九部から佳話を抄出したものである。⁷

3. 『笑府』 原本と抄訳本の収録状況について

3.1 『笑府』 原本の収録傾向

抄訳本『笑府』と比較する前に、まずは『笑府』原本の収録数と性格を検討したい。『笑府』の書誌情報を整理してみると、原本の収録状況が次のようになる。表1は、『笑府』原本の収録状況を示すものである。

表1のように、『笑府』は身分、職業、風俗や性情など広い対象にわたる笑話を720話(類話含め)収録した。収録数からみると、類話数は少なくないと言えよう。原本に比較的によく収録されていたのは、不良な風習をテーマとした刺俗(89話)、僧侶・様々な職業をテーマとした廣萃(71話)と変な趣味・癖を

⁵ 武藤禎夫(1970)『江戸小咄の比較研究』東京堂出版 p.24

⁶ 武藤禎夫(1970)『江戸小咄の比較研究』東京堂出版 p.24

⁷ 武藤禎夫(1970)『江戸小咄の比較研究』東京堂出版 p.25

表1 『笑府』 原本の収録状況

(単位：話)

部名	古艶	腐流	世諱	方術	廣萃	殊稟	細娛	刺俗	閨風	形體	謬誤	日用	閨語	合計
*類話数	11	10	11	5	10	13	5	17	9	13	1	13	2	120
収録数	37	59	66	40	71	68	30	89	63	63	33	58	43	720

*『笑府』には同じタイトルでいくつかの異なるバージョンの笑話が登場するので、類話を新話として数える。

テーマとした殊稟(68話)である。次に、貧乏人をテーマとした世諱(66話)、不倫関係をテーマとした閨風(63話)と障害者をテーマとした形體(63話)は同数で平均的な収録数である。最後、官吏と大尽をテーマとした古艶(37話)、雑の部をテーマとした閨語(33話)の収録数はやや少ない。

総じて言えば、本笑話書は世情諷刺、庶民趣味と艶笑趣味という三つの特徴を持つことが窺える。『笑府』は、中国笑話にありがちな風刺や皮肉といった性格を踏襲している。特に明朝末期には、政治の腐敗や思想の弾圧など、社会不安が醸成されるようになった。そのため、原本には、腐敗官僚、藪医者、知ったか振りの教師、破戒の僧侶や道学者、吝嗇家や貪欲な地主など、社会の様々な異変を風刺した話が数多く収録されている。また、伝統的な典籍の崇高な

文学趣味や儒教の禁欲思想とは著しく対照的に、『笑府』に収録された笑話の多くは、滑稽な民話に由来し、その内容は庶民階層の生活に密着した俗なものである。また、その中で生活の細々とした事柄についての単純な話だけでなく、性に関する下品な話も多く収録され、庶民階層の純粋な感情と世の有様をそのまま反映している。

3.2 『笑府』抄訳本三種の収録傾向

抄訳本の笑話はすべてが『笑府』に由来するのだろうか。また、抄訳本『笑府』はいかなる笑話を採録するのかということを究明するために、『笑府』抄訳本三種の書誌情報を整理してみる。表2は、『笑府』抄訳本三種の笑話の出典を示すものである。

表2 『笑府』抄訳本三種の出典

抄訳本	原本	他の出典
A. 大本『笑府』	『笑府』(151話)	『(新鐫)笑林広記』(25話)
B. 小本『笑府』	『笑府』(75話)	①『(新鐫)笑林広記』(1話) ②『笑禅録』(1話) ③『雪濤小説』(1話) ④未詳(2話)
C. 『刪笑府』	『笑府』(70話)	なし

表2のように、抄訳本によって出典が異なる。まず、大本『笑府』は原本の笑話以外に、『(新鐫)笑林広記』の笑話を25話収録した。次に、小本『笑府』は原本の笑話を除いて、『(新鐫)笑林広記』、『笑禅録』や『雪濤小説』などの笑話を5話収録した。最後、三書のうち、

『刪笑府』だけはすべて『笑府』から採録している。つまり、『笑府』抄訳本三種の出典は『笑府』だけではなく、ほかの中国笑話集の笑話もある。表3は、『笑府』抄訳本三種の収録状況を示すものである。

表3 『笑府』抄訳本三種の収録状況

(単位：話)

部名	古艶	腐流	世諱	方術	廣萃	殊稟	細娛	刺俗	閨風	形體	謬誤	日用	閨語	合計
重複数	4	4	5	3	4	6	1	5	6	2	2	0	4	46
収録数	14	24	24	21	23	33	4	25	29	19	12	9	13	250

表2、表3を見ればわかるように、『笑府』以外の出典と重複の笑話を除いて、抄訳本三種は主に原本の笑話を250話採集している。収録数からみると、重複数が少なくない。そのうち、抄訳本三種に最も多く収録されたのは、殊稟(33話)と閨風(29話)である。それに対して、日用(9話)、細娛(4話)の収録数が最も少ない。また、刺俗(25話)、腐流(24話)、世諱(24話)と廣萃(23話)の収録数は相対的に平均である。笑話の題材からみると、『笑府』抄訳本三種の著者は人間の変な趣味・癖(殊稟)と艶笑譚(閨風)に関する話を採録する傾向がある。また、笑話の登場人物からみると、抄訳本三種の著者は書生(腐流)、貧乏人(世諱)、僧侶と様々な職業(廣萃)を主人公とした話を採集する傾向があるが、生活用品、のらくら者を対象とした話を採集するのがやや少ない。抄訳本『笑府』

の著者は、笑話の題材に一定の選択性を持っていると言えるだろう。

4. 『笑府』の翻訳・翻案状況について

4.1 『笑府』と抄訳本・咄本の文体の諸相について

日本で刊行された『笑府』は、原本の内容を継承した和刻本『笑府』以外、著者の原文の扱い方によって、次の三つのタイプに分けられる。一つ目は、直接的に白文に訓点と注釈をつけるというものである大本『笑府』と『刪笑府』がこれに該当する。二つ目は、原作をありのままに訳す翻訳文である。訓点付き漢文と翻訳文という二つの文体を並べている。三つ目は、原作の筋や内容をもとに改作(翻案)するものである。例えば、『笑府』に関する江戸小咄である。三つのタイプを整理してみると、次の表4となる。

表4 『笑府』と抄訳本・咄本の文体的特徴

書型	書籍	文の種類	特徴
原本	『笑府』	白文	本文だけで訓点や注釈などが付いていない漢文である。
和刻本	『笑府』和刻本	白文	同上。
抄訳本	A. 大本『笑府』	訓点付き漢文	白文には、訓点、注釈と左訓をつけられる。
	B. 小本『笑府』	訓点付き漢文と翻訳文	①白文には、訓点、注釈と左訓をつけられる。 ②忠実に訳す翻訳文。
	C. 『刪笑府』	訓点付き漢文	白文には、訓点、注釈と左訓をつけられる。
咄本	『笑府』に関する江戸小咄本	翻訳文と翻案文	忠実に訳す翻訳文もあり、原作の筋や内容をもとに改作する翻案文もある。

表4に示すように、書籍間の文体的な特徴から、おおむね『笑府』の受容過程を推測できる。まず、原本は江戸時代に日本に輸入され、和刻本が刊行さ

れた。和刻本はいかなる注釈もなく、原本の文体と全く一致している。例えば、内閣文庫『笑府』和刻本である。次に、翻訳は漢語を和語に訳したもので

ある。作者は読者が読みやすいように、白文に訓点、振り仮名や左訓などつけて翻訳している。例えば、『笑府』の抄訳本三種である。漢文を訳解する際には、逐語訳する必要があるから、相当な漢文の読能力がなければ、抄訳本の作者はなかなか翻訳できない。また、読者は訓点付き漢文を直接的に読むが、漢文の基礎がなければ、その中身をなかなか理解できない。したがって、『笑府』の抄訳本の笑話を享受するのは、一定の漢文素養を備える人だと考えられる。しかし、小本『笑府』の作者は訓点付き漢文と翻訳文という二つの文体を併用したが、『笑府』の笑話が訓訳本から通俗物へ変わっていく中間的なものと見られる。最後の段階では、一部の話の筋や内容をもとに改作(翻案)するのである。翻案された笑話は常に平易で、知識がなくても読めるから、読者層が広がっている。特に、江戸時代の戯作者による『笑府』に関する小咄が多く生まれ、漢文訓読や白話表現などに関する知識を持たない層にも広く親しまれていた。

総じていえば、『笑府』抄訳本と咄本の間には文体に大きな差異があるのである。その中から作者が原文の筋や内容を把握する程度を垣間見ることができる。抄訳本の場合には、作者ができるだけ原作の内容や筋を維持し、笑話の中身を読者に忠実に伝える。

例えば、訓点付き漢文と翻訳文である。それに対して、小咄本の場合には、作者が原作の筋や内容を生かして、改作する話がより多い。例えば、『笑府』に関する翻案作品である。翻訳と翻案の境は、作者が原文にどこまで忠実であるかに大きく左右される。したがって、各書物の編者が原文の筋や内容をどの程度残し、または改作するか、この点が日本における『笑府』という笑話集の受容状況を考察する上で極めて重要なのである。

4.2 『笑府』の翻訳について

抄訳本『笑府』の施訓者は漢文訓読の方法で原文を扱うだけではなく、いずれも漢字や漢語の左右に仮名を施し、原文における白話語彙、連語と文への置換という翻訳ストラテジーを使用する。また、抄訳本三種はいかなるストーリー上の変更もなしに、原文の意味を忠実に再現する段階にあるということがわかる。抄訳本『笑府』の傍訓の種類とつけ方を整理して、施訓者の翻訳方策を推測できる。抄訳本『笑府』の傍訓は、右訓、左訓と両者の併用という種類が三つある。そのうち、A本とB本の施訓者は、主に白話語彙と少量の連語に訓を施すのに対し、C本の施訓者は主に大量の連語と文に訓を施すのである。具体的な例を挙げると、次の表5のようになる。

表5 抄訳本『笑府』における単語語彙・連語・文に付けられた訓の例

書型	語彙	連語	文
A本	時候(左:トキ【時】) 〔第6話・2丁表・10行目〕	畢姻後(左:コンレイシマイ【婚礼しまい】) 〔第117話・6丁表・1行目〕	熱喫乎。(左:アタ、メテノムダカ。【温めて飲むだか。】) 〔第37話・9丁表・7行目〕
B本	契書(左:テガタ【手形】) 〔1. 索債・4丁裏・4行目〕	鬼托生(右:モウヂヤウマレカ、ル【亡者生まれかかる】) 〔2. 清福・5丁裏・4行目〕	千萬掣 _レ 帶 _シ 我 _レ 去 _レ 。(左:トウゾワレニシテイテクレ。【どうぞ我にしてください。】) 〔2. 清福・5丁裏・2行目、3行目〕
C本	驢(左:ウサギウマ【兎馬】) 〔1. 李三老・1丁表・7行目〕	入 _レ 城 _ニ (左:ミツケヲハイ _ル 【見付を入る】) 〔1. 李三老・1丁表・5行目〕	今・年種 _レ 了 _芋 ・苜 _ヲ 罷 _レ 。(左:コトシハイモヲツクラウ。【今年は芋を作ろう。】) 〔3. 合種田・1丁裏・7行目、8行目〕

それ以外、C本は文のバランスを保つために、原文では二文であるが、施訓者によって日本語に訳されると、一文となる場合が少数だがある。例えば、C

本の第三話「凍・氷」の文末の二文の左訓は、「出_シ了_一場ノ尿_ヲ。逃_レ走_レ了。(左:シヤウベンヲタレテニゲヲツタ。【小便を垂れて逃げをつた。】)」である。

しかし、同様の表記方法は、他の二種には見られなかった。言葉の単位により、『笑府』抄訳本三種の施訓者はそれぞれ訓をつける方法が異なるということがわかる。

また、施訓者が漢語の意味と対応する和語を選択して置き換える場合には、理解上のずれが生じ、さらに誤訳する可能性がある。『笑府』抄訳本三種の類話を整理してみると、A本とB本には16話の類話があり、A本とC本には22話の類話がある。A本とC本には類話がない。一部の類話の傍訓を取り上げて語彙の意味にいかなるずれがあるかを検証してみよう。

(ア) 傍訓が全く一致している場合

① 堵子 (左: アヅチ【安土】A本〔第43話・10丁裏・8行目〕、左: アツチ【安土】B本〔8. 堵子・9丁表・4行目〕)

『白話小説語言詞典』によれば、「堵子」とは、昔の練兵場の矢の的ということである。A本の左訓もB本の左訓も、「アヅチ(アツチ)」である。⁸『広辞苑』によれば、「安土(アヅチ)」とは、弓を射る時、的の背後に土を山形に築いた所という解説がある。両者の傍訓だけではなく、矢の的としての意味も同じである。⁹

② 囑 (左: イ、ツケ【言い付け】A本〔第32話・8丁表・3行目〕、左: イヒツケテ【言い付けて】C本〔26. 問令尊・7丁表・7行目〕)

『白話小説語言詞典』によれば、「囑」とは、「言い付ける」、「任せる」ということである。A本の左訓もC本の左訓も、「イ、ツケ(テ)」である。¹⁰『新明解国語辞典』によれば、「言い付ける」とは、「ある事をしる、またするなと言う」、「命令する」ということである。両者の傍訓だけではなく、意味も同じである。¹¹

⁸ 注:「堵子」、即ち「塚(子)」である。白維国(2010)『白話小説語言詞典』商務出版社 p.305

⁹ 「安土」新村出(1976)『広辞苑第二版補訂版』岩波書店 p.38

¹⁰ 「囑」白維国(2010)『白話小説語言詞典』商務出版社 p.2023

¹¹ 「言い付ける」新村出(2017)『新明解国語辞典第七版特装青版』三省堂 p.58

(イ) 傍訓の意味は近いが、イメージやニュアンスなどが異なる場合

① 炯々 (左: キラキラ【きらきら】A本〔第3話・1丁裏・9行目〕、左: ヒカヒカ【ひかひか】B本〔11. 頌屈・11丁表・6行目〕)

『漢語大辞典』によれば、「炯々」とは、明るいまたは光沢のある外観ということである。¹²A本の左訓は「キラキラ」である。光り輝くさまを意味する。それに対して、B本の左訓は「ヒカヒカ」である。「ひかひか」に相当する古いいい方であり、光り輝き、つやがあるさまの意味を表す。両者の意味が近いが、イメージがやや異なる。

② 令尊 (左: ゴシンプハト【御親父はと】A本〔第32話・8丁表・3行目〕、左: オヤヂサマハト【親父様はと】C本〔26. 問令尊・7丁表・7行目〕)

『白話小説語言詞典』によれば、「令尊」は相手の父親を呼ぶときの敬語表現である。¹³A本の左訓は「ゴシンプ」という古い言い方で、他人の父を敬っている語を意味する。それに対して、C本の左訓は「オヤヂサマ」は父親を敬っている語を意味する。父親を尊敬する表現で意味的に同一であるが、「オヤヂサマ」のニュアンスより、「ゴシンプ」のほうがかたい表現である。

(ウ) 誤訳する場合

① 待詔 (左: カミユヒ【髪結い】A本〔第172話・15丁裏・8行目〕、左: テマトリ【手間取】B本〔64. 待詔・46丁表・8行目〕)

「待詔」は語意が豊かで、『漢語大辞典』によれば、**①**詔命を待つこと、**②**漢代の官名、**③**内廷に供養するために待機している人、**④**昔、村では理髪師のことを「待詔」と呼んでいるという意味が四つある。¹⁴この笑話では、理髪師という意味で使われている。A本の左訓の「カミユヒ」は、以上の**④**の意味に対応する。それに対して、B本の左訓の「テマトリ」は、手間賃を取って雇われること、また、その人の意味を表す。¹⁵

¹² 「炯炯」羅竹風(1989)『漢語大辞典第七巻』漢語大辞典出版社 p.51

¹³ 「令尊」白維国(2010)『白話小説語言詞典』商務出版社 p.952

¹⁴ 「待詔」羅竹風(1989)『漢語大辞典第三巻』漢語大辞典出版社 p.944

¹⁵ 「手間取り」新村出(2017)『新明解国語辞典第七版特装青版』三

原語の語義とは全く異なるので、この言葉は原語と全く異なる意味を持つため、施訓者はこの言葉の扱いに一定のズレを生じさせ、結果として誤訳を生じさせている。

②間漢(左:ノラモノ【のら者】A本〔第71話・16丁表・9行目〕、左:ビンボウモノ【貧乏者】C本〔53.糠・13丁裏・4行目〕)

『白話小説語言詞典』によれば、「間漢」は、定職を持たず、幫間をして暮らしている人や、ぶらぶらしている人である。¹⁶A本の左訓は「ノラモノ」で、のらくらと遊び暮らす者を意味する。C本の左訓は「ビンボウモノ」で、「貧乏者」は貧しい人のことである。両者の意味と比べれば、「のら者」の方が本来の意味に近く、「貧乏者」には本来の意味は当てはまらず、むしろ誤訳と言えよう。

さらに、抄訳本『笑府』の翻訳方策と笑話との関係を整理すると、次のようになる。A本は、白話語彙における俗語の解釈に着目し、特に文末に9語の白話語彙に詳細な解釈を添え、笑話における中国特有の言語と物事を読者に理解させると推測している。B本は、原文に訓点をつけるが、それに対する書下文は全く訓点の順番によって書き下すことなく、原文への逐語訳と類似する。また、白文の左訓に対応する翻訳文には、右訓をつけられる場合が少なくない。読者が白話語彙の意味と笑話の文脈を理解するのに役立つと推測できる。C本の訳者は、基本的に各笑話の最後の一文に解釈の左訓をつける。最後の一文が笑話のオチであり、笑いのツボと言われている。このようなつけ方は、最大限に読者に「笑いのツボ」を納得させる効果を狙ったものではなかろうか。

4.3『笑府』の翻案について

次に『笑府』に基づいた小咄本の翻案の方法について検討する。抄訳から翻案への江戸小咄化の過程において、いかなる内容や筋が残されるか、または改作されるかということについて、『笑府』の笑話の利用と置換の程度によって、大体、以下のような三つの翻案

方策を推測できる。具体的な例を見てみよう。

(ア)原作の主要な内容と筋はほぼ維持され、部分的な変更にとどまる例。

一 (A)蒙師止識 (B)川字。見弟子呈書。欲尋。川字教之連掲數葉無有也。忽見三字。乃指而罵曰。我着處尋你不見。你到睡在這裡。

『笑府』・腐流部・川字

ある(A)へつぽこ先生、(B)川と河の別字あるを弟子に教へんとて、まづ川といふ字意を尋ねに、辞書をしきりに繰れども、さらに見当らず。たちまち三の字を見出して、その所をはたと打ち、いくら尋ねてもないはずだ。ここに寝くさつているものを。

『落嗺笑種蒔』・学者

この話は、川の字さえも知らず、「三」を「川」に間違えた下等な教師を風刺するという内容である。原話と小咄との間には、ただ傍線部(A)、(B)という相違点が二つあるだけである。傍線部(A)「蒙師」は、啓蒙の先生であり、子供を教育する先生ということである。それに対して、小咄本の主人公は「へつぽこ先生」に置き換えた。傍線部(B)「川字(川の字)」は、「川と河の別字」に置き換えられた。内容上の細やかな変更以外、両則笑話の筋が全く一致している。

(イ)原作に対して比較的にな大きな変更を行うが、原作と比較して明らかに原作の痕跡が見られる例。

一富人素性好古。或偽以(A)舜所造漆碗。周公撻伯禽之一杖。孔子杏壇所坐之席。求售。各以千金得之。襄貲既空。乃左執虞舜之碗右持周公之杖。身披孔子之席。行乞于市曰。求賜(B)太公九府錢一文。

『笑府』・殊稟部・好古

さる銀持の旦那、殊の外古い物好きにて、何でも古い物とさへいへば、何の役に立たぬものでも、金銭を惜しまず求められけるが、それゆへ程無ふ身代減却て、今日食ふ物もなきやうになり、詮方なく乞食と出かけられけるが、乞食になりても入用の物とて、(A)仁徳天皇の高き屋にお敷きなされたる荒薦と、弁慶の飯椀と西行の行脚の杖と、この三品を残し置きけるが、件の薦をかぶり、飯椀を持ち、杖をつき、門構へよろしき軒に立つて、モシ、私は腹からの乞食でもござりませぬ。身上をしもつれまして、かやうの身分になりました。どふぞ一銭の御合力頼みますと言はれければ、

省堂 p.1038

¹⁶ 「間漢」白維国(2010)『白話小説語言詞典』商務出版社 p.1677

いかさま、あれは由緒ある人と見へると一文やられければ、戴き、モシ、近頃自由な事ながら、どふぞ **(B) 古銭**と代へて下さりませ。

『軽口五色紙』上巻・俄乞食

笑話の登場人物はいずれも骨董をこよなく愛する金持ちである。主人公が貯金をはたいて買った骨董品で物乞いをするほど骨董品に夢中になるというストーリーが展開される。登場する貴重な骨董はそれぞれ対応している。傍線部(A)では、「舜の作った碗」と「仁徳天皇の髙き屋にお敷きなされたる荒薦」、「周公が使った杖」と「弁慶の飯椀」、「孔子が敷いた席」と「西行の行脚の杖」、傍線部(B)では「太公九府銭」と「古銭」とがそれぞれ対応している。中国人によく知られている物事はすべて日本固有のものに置き換えられたが、両者の内容と筋を見比べると、明らかに原作の痕跡を見出せる。

(ウ) 原作の内容と筋の一部を借りて、原作と比べても原作の痕跡を見分けることは難しい例。

一僕隨主人應試。巾箱偶墜。呼曰。頭巾 **(A) 落地**矣。主人曰。落地非佳語。宜呼為 **(B) 及第(地)**。僕領之。既控好。因復曰。 **(C) 今後再不及地**了。

『笑府』・謬誤部・頭巾

仰に五魔の業なる者ありしが、大晦日の夜、久八を呼びて、明日は元日じゃほどに、屋内の諸道具にも旦那様のといふ事を付けて言へといへば、畏りましたとて、元日に夙く起き、茶を点てて、「旦那様の大服」といへば、旦那、喜ぶ事限りなし。又、「旦那様のお雑煮」、「旦那様のおせち」と、一々に言ひけり。その後、鯛を焼きけるが、焼け鯛を挟み落して、 **(C) はあ、旦那様の首が落ちた**といふた。

『軽口大わらひ』巻三・物いまびする者の事

いずれも言葉のタブーにまつわるものである。「地/di/」と「第/di/」は中国語で同音異義語である。傍線部(A)「落地(第)」は、単なる「地に落ちる」という意味だけではなく、「中国の科挙試験に合格しない」という意味もある。原話の傍線部(C)「不及地(第)」とも言われている。逆に、科挙試験に合格するのは、傍線部(B)「及第」と呼ばれている。科挙試験を準備している主人にとって、最も聞きたくないのは、「落地(第)」「不及地(第)」（合格しない）である。この

笑話と同じように、「首が落ちる」は日本語で単なる「首が地に落ちる」という意味もあり、「首になる」という意味もある。従って、正月に物事の縁起を担いでいる「五魔の業なる者」にとっては、小咄の傍線部(C)「旦那様の首が落ちた」は大変な言い間違いである。登場人物も舞台も全く異なるが、両則笑話の最後のオチ傍線部(C)は全く同工異曲である。

5. おわりに

本稿は、『笑府』と抄訳本・咄本の異同、および翻訳・翻案ストラテジーについて比較検討したところ、以下の三点が明らかになった。第一、笑話の題材から見れば、『笑府』の笑話は日本笑話の題材を豊富にして、内容を広げた。一方、日本笑話は『笑府』の笑話に対して題材の選択性がある。つまり、当時の町人を中心とした読者層に対応して、抄訳本と咄本の中には、「人間の変な趣味・癖(殊稟)」と「艶笑譚(閨風)」を広く収録した。これらの題材は当時の日本社会に合ったものだと考えられる。第二、抄訳本の訓のつけ方から見れば、読者に理解させるために、原文における白話語彙、連語と文への置換という翻訳ストラテジーを使用する。中でも、難解な白話語彙に和語、あるいは意味が通じる言葉を置き換えた。ただし、施訓者は理解上のずれが存じ、さらに誤訳する可能性がある。第三、『笑府』の笑話は主に翻訳・翻案の方法を通じて漢文笑話から小咄へ改作する。この種類の笑話は日本式に合わせるために、笑話の登場人物であれ、ストーリーの展開であれ、いずれも日本人に馴染み深いことに置き換えた。抄訳本・咄本の翻訳と翻案は、日本における笑話集『笑府』の伝播と受容を促進すると言えよう。

参考文献

日本語文献

- 石崎又造(1967)『近世日本に於ける支那俗語文學史』清水弘文堂書房
森銑三・池田孝次郎・柴田宵曲(1990)『日本人の笑』講談社
長島平洋(2002)「海外ジョークの日本における受容性」『笑い学研究』第9巻

大庭修 (1984) 『江戸時代における中国文化受容の研究』
角川書店

武藤禎夫 (1970) 『江戸小咄の比較研究』 東京堂

荒尾禎秀 (2008) 「和刻小本『笑府』翻訳文の文体」『東京学芸大学紀要人文社会科学系 I』 第五十九集 .pp.147-157

川上陽介 (1999) 「『笑府』三種比較攷(上)」『国語国文』
pp.17-34. 京都大学文学部国語学国文学研究室編 68(1)

川上陽介 (1999) 「『笑府』三種比較攷(下)」『国語国文』
pp.17-35. 京都大学文学部国語学国文学研究室編 68(2)

新村出 (1976) 『広辞苑第二版補訂版』 岩波書店

新村出 (2017) 『新明解国語辞典第七版特装青版』 三省堂

中国語文献

周作人 (1933) 《苦茶庵笑話選》 [M] 北新書局

周作人 (1958) 《明清笑話四種》 [M] 人民文学出版社

王利器 (1984) 《中国古代笑話選注》 [M] 北京出版社

魏同賢 (1993) 《馮夢龍全集笑府》 [M] 上海古籍出版社

竹君 (1992) 《笑府》 [M] 海峡文芸出版社

白維国 (2010) 《白話小説語言詞典》 [M] 商務出版社

羅竹風 (1989) 《漢語大辭典》 [M] 漢語大辭典出版社

デジタル資料

大本『笑府』 国文学研究資料館鶴飼文庫 <https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/200020649/viewer/1>

小本『笑府』 立命館 ARC <https://www.dh-jac.net/dbl/books/results1024.php?f1=hayBK04-0026&f12=1&-sortField1=f8&-max=1&enter=default&lang=ja>

『刪笑府』 立命館 ARC <https://www.dh-jac.net/dbl/books/results1024.php?f1=hayBK02-0140&f12=1&-sortField1=f8&-max=1&enter=default&lang=ja>

河口静斎の仮伝体作品研究

——「楮思問伝」と「相思君伝」を中心に——

人文社会科学研究所 地域政策科学専攻 文化政策コース2年
任 軼

一、はじめに

仮伝とは物や道具など人間以外のものを主人公とした作られた伝記をいい、そのような擬人化された伝記の文章の形態を仮伝体という。唐宋八大家の首である唐代の文人韓愈（768 - 824）によって創作された「毛穎伝」がその形式の起源だとされている¹。この形式は中国の清まで行われ、長い生命力を保持してきた。海外においても、高麗王朝の時代の文人に大きな影響を与え、乱世において彼らは仮伝体作品の書写を通じて、自分の国への憂いや民生への関心、君主への不満などを後に数多くの名作を残した²。日本でも数多くの仮伝作品が残っているが、管見の限り、その内容や形式などを詳細に検討した先行研究は極めて少ない。本稿は日本の仮伝作品の系譜を押さえながら、江戸中期の儒者、室鳩巢の高弟である河口静斎（1703 - 1754）が書いた仮伝作品の「楮思問傳」「相思君傳」を取り上げ、仮伝の体裁の意味及び文中の君主の個人像の分析を通じて、静斎の不遇意識を考察したいと考えている。

仮伝作品の研究について、西上勝氏は（2008）は韓愈の「毛穎伝」について、道具としての毛筆に着目し、外在物質 - 用具 - 人間身体という三者の間に存在する関係から『毛穎伝』の文学的価値を検討し、『毛穎伝』は史伝の文体をなぞって文房具と士人の間に起こった新しい関係を表現していることを示した。ほかにも韓愈の文学観における戯作的一面を捉え、韓愈の「毛穎

伝」、「送窮文」、「師説」などの作品に現れた韓愈の文学観、人生観などを分析する先行研究が日本側で多数出ているが、その一方で日本人が書いた仮伝作品についての研究は極めて少ない。卞东波（2021）は天明二年（1782年）に成立した『器械擬仙伝』が日本唯一の漢文仮伝文集と主張し、そのなかに「帰隠」や「昇仙」などの道教の思想が顕れ、その叙事風格も明らかに中国の高士類、神仙類の雑伝の影響を受けていると指摘した。しかし、江戸末に出版された『貨財擬仙伝』も漢文仮伝作品集に属すると思うので、日本の仮伝の研究にはまだたくさんの余地が残っているのである。

本研究は日本の仮伝作品の流れを整理しながら、江戸時代中期の儒者、河口静斎の仮伝作品「楮思問伝」「相思君伝」を取り上げ、当時の日本における儒学者の置かれた環境及び静斎の儒者の立場から、仮伝で描かれた人物像とその意味について分析を行う。

二、日本における仮伝の受容

（一）平安時代から江戸末期までの仮伝作品

韓愈の「毛穎伝」の影響を受けて作られた、日本で一番古い仮伝は、現在のところ平安時代中期の『本朝文粹』の中に収録されている「鉄槌伝」で、朝鮮の最初の仮伝作品林椿の「麴醇傳」（12世紀末）より一世紀も成立が早い。清水茂氏（1956）は唐代の擬人化された伝の影響がとて顕著な一例であると指摘した。「鉄槌伝」は漢文で、全文は737字から成り、男性器を擬人化した内容で、著者である羅泰については未詳である。江戸時代に入ると仮伝作品が多数現われ、仮伝集も作られた。蕉門の俳人森川許六が編集した俳文集『本朝文選』（1706）（または風俗文選）の中にも「靈

¹ 黄晓菊, 赵维国著「论假传的文体旨趣及其“以文为戏”的理论反思」『文艺理论研究』(36) 2018-06pp. 125-131

² 李杉婵著「朝鮮假传对中国唐宋叙事文学影响的接受」『前沿』(15) 2013-08pp. 191-193

虫伝」(米)、「五郎四郎伝」(麦の餅)、「疝気伝」(疝気)などといった仮伝体作品が収録されたが、いずれも和文で強く遊戯性あふれる作品である。静斎が書いた「楮思問伝」と「相思君伝」は後に詳しく述べる。また江戸の後期に木村子虚(1752 - 1811)の仮伝作品「楽處士伝」がある。これは今原文が残っていないが、水戸学の中心人物である江戸後期儒者の藤田幽谷(1774 - 1826)がこの作品のために書いた序文「楽處士伝序」が残っており、その文の存在を証明している。また、江戸末期には仮伝作品集も現れ、山口玄耕が書いた『器械擬仙伝』の中には鏡、団扇、杖、枕などの仮伝35編を収録している。ほかにも享葵亭主人の『貨財擬仙傳』があり、『器械擬仙伝』と同じく漢文で書かれ、著者の詳細はいずれも不明だが、漢文で書いた明の仮伝集の影響が強いことが窺える。

(二) 日本儒者の仮伝作品及び文章論

河口静斎の仮伝の内容に入る前に、その背後にある儒者の文章論について確認を行う。朱子学の大成者朱熹は「文道合一」、すなわち文の中に必ず道が含まれ、道は文の中に流れてくると主張した。その道も韓愈、柳宗元が主張した道徳の道、政治の道だけではなく、宇宙の道も含まれている³。その思想は「近世儒学の祖」と称される藤原惺窩が継承し、惺窩も「道外无文、文外无道」と述べ、この理論を自己の綱領とした。さらに彼の弟子たちも往々してその理論に従ってさらに自分の弟子に伝承した⁴。木門十哲と呼ばれる室鳩巢(1658 - 1734)も唐宋古文の模倣作を多数執筆しているが、その中には戯作的な文章は管見の限り見当たらない。故に、室鳩巢の下に十二年近く就学した静斎がただ戯れの動機で韓愈の仮伝作品をまねているとも考え難い。むしろ水戸学派の藤田幽谷が木村子虚の「楽處士伝」への序文で、「子虚の文章の志は世を諷することである、戯れでこの文を書くのは韓愈と同じが、その中に潜んで思想が違う」⁵と書いたように、静斎も

ただ戯れという動機のみで仮伝を書いたとは考えにくいと思うのである。

三、静斎の「楮思問伝」「相思君伝」について

(一) 韓愈の「毛穎伝」について

本題に入る前に、まず韓愈の「毛穎伝」のあらすじ及びその文の性格について紹介しておく。河口静斎の師である室鳩巢が唐宋古文、中でも韓愈の文を自身の漢文制作の規範としていることは山本嘉孝(2021)の研究で明らかにされている。静斎も鳩巢が文章の規範とする韓愈の文章のひとつ『毛穎伝』を真似して仮伝作品を作ったと考えるのも自然である。しかし、鳩巢が韓愈の古文を意識しながら書いた漢文書簡⁶と違い、「毛穎伝」は「文を以て戯と為す」の文風で、当時の儒者が推賞している「文を以て道を載る」を背馳するため、常に批判されている⁷。

「毛穎伝」は韓愈が毛筆を擬人化し、司馬遷の史記の紀伝体のスタイルを真似ながら作った文章である。具体的な創作年代は不明だが、おおよそ唐憲宗の元和初年(806 - 810)と言われる⁸。全文は715字、「送窮文」「鯉魚文」「座硯文」と同じく『韓昌黎集』第三十六卷雑文編に収録されている。文章は以下の三つの部分に分かれる。

①まず毛穎の出自について詳しく述べる。神話、歴史典故、寓話を交えて「毛穎」の先祖「兔」の由来を説明し、後に毛穎が秦の大將蒙恬に捕まれ、博識を以て、秦始皇帝に仕えることになったことを記す。

②毛穎は天文、地理、医学、政治に多大な貢献したため、始皇帝から重用され、「管城子」の号を賜り、益々寵愛されたが、年を取るに従って、禿頭になり、また画を描くのに皇帝の意にかなわなくなり、老いて役に立たない毛穎は結局秦始皇帝により疎まれるに至った。

③史記の太史公曰のところを真似て、毛穎の功績とその境遇について評価を下す。重用され最後には疎遠

³ 程剛著「文道合一与诗乐合一朱熹与邵雍文学本体论之比较」『孔子研究』(05)2008 -09pp. 58-69

⁴ 张红著「江戸初期朱子学派的诗文观念及杜甫接受」『中国文化研究』(冬之卷)2017 -11pp. 160-171

⁵ 菊池謙二郎編：幽谷全集[M]。吉田彌平。1935 原文は「而戲謔之文。以寓風世之意。其志固在於風世。以戲謔為文。則與韓子同。而所以用心。則不同」

⁶ 山本嘉孝著「目安箱と韓愈一室鳩巢における唐宋古文・朱子学・経世の連関」東英寿編『唐宋八大家の探求』(花書院)2021

⁷ 山本嘉孝著『詩文と経世 - 幕府儒臣の十八世紀』(名古屋大学出版会)2021

⁸ 于泓、毕宝魁著「浅析韩愈《毛颖传》的深层思想」『广东社会科学』(2)1994 -04pp. 108-110

される毛穎について「秦恩は正に少なし」という評言を下している。

「毛穎伝」について文体、主旨、形式などについての先行研究はすでに多数出ている。特にその主旨について、皇帝や周囲の執政大臣との支配階級の内部矛盾を暗示している⁹等の説があり、ほかには、毛穎と秦始皇帝について、毛穎は韓愈自身の不遇の境遇を寓している¹⁰、或いは唐代著名な政治家、文学家である陸贄(754 - 805)を暗喩¹¹しているなど、また秦始皇帝の暗喩に関しても、唐代の君主の代宗、徳宗、憲宗を暗示しているという見方があり、論者によって誰を指しているかの結論はそれぞれ異なっているが、秦始皇帝の個人像も当時の君主を暗喩していることは中国国内の学者の間ではほぼ通説になっている¹²。総じて、卢宁、李振荣(2001)は韓愈の文章の特徴について、「文を以て戯と為す」と「文を以て志を明かす」が韓愈の古文創作の両面で、後者は正に韓愈が古文を使って新しく創造した風刺文学であると指摘している。

(二) 静斎の「楮思問伝」「相思君伝」について

韓愈「毛穎伝」における主な登場人物の毛穎と秦始皇帝二人の人物像を通して現実の君臣関係を喩えていたのに対して、静斎の「楮思問伝」「相思君伝」で気づくのは登場人物が豊富で、主人公以外にも多くの擬人的な人物を作り出し、君と臣の関係のみならず、家臣間の関係、さらに世の人の主人公に対してする評価も含めて描いている点である。ここでまず「楮思問伝」、「相思君伝」の登場人物を紹介しながらあらすじを紹介する。

「楮思問伝」は静斎が寛延三年(1750)に紙を擬人化して書いた仮伝である。静斎の文集『葶山集』の中に収録され、全文は537字で、比較的短い文章でありながら、登場人物は主人公の楮思問(紙)、方氏(木の板)と策氏(竹簡)、秦始皇帝、蔡倫及び最後の評者大居先生(静斎自身)などで豊富である。この文章も大きく三つの部分から成る。

①最初のところで楮思問の身分や出自を紹介する。また方策¹³二氏の興亡の過程を描いた。書契(書籍)において大功があり、孔子が六経を修するときには最も其任を託した方策氏について、始皇帝が「是古非今」の理由で、其族を集めて焚いた。二氏が始皇帝の滅族行為によってほぼ遺族がなくなり、最後東漢の宦官蔡倫¹⁴が楮氏を推したため、結局二氏は滅亡した。

②楮思問の先祖のある楮先生は毛穎とともに始皇帝に仕え、吏事に達したため、同じく始皇帝の寵愛を受けた。その子孫である楮思問は、性格が温和で、ほかに目立った長所がないが、人は読書の時思問の力を借りている。校書郎の官位を与えられ、職に適任し、学者に「楮校書」と称されている。

③最後は太初先生(静斎自身)が楮思問に対する評及び伝を作った理由を述べる。「思問を認識している者も知らない者も皆同じ思問の重要性がわかっていないとの評価を下した。また三韓人が思問を重視し、思問が人を聡明にするということで、三韓人はこれを「聡明子」と名付けた。夷狄すら思問を大事している状況を見たことが楮思問に伝を作る契機になったと太初先生は述べる。

もう一方の「相思君伝」の全文は879字で、「煙草」を擬人化して作った仮伝である。制作年代は不明、後に大槻玄沢が編纂した煙草に関する文章を収録した著作『蔦録』(寛政9年(1797)序刊)の中にも収録されている。これは内容により四つの部分に分けられる。

①まずは相思君の家柄を詳しく語る。相思君の先祖の来朝は慶長年間で、中に一番有名な部族が服部¹⁵氏であると史実を踏まえながら述べる。次に牢屋に入れられた相思君が金持ちの葉買に救われたのをきっかけに、京都に至って名声が爆発し、大いに流行、貴族たちに歓迎され、君主に推薦された地位を確立した。

②相思君の仕官の経歴について述べる。相思君は主上の側に仕え、主上に益々愛され、「通靈先生」

⁹ 孙昌武著『唐代古文运动通论』(百花文艺出版社)1984

¹⁰ 郭预衡著『中国古代文学史』(上海古籍出版社)1998

¹¹ 孙羽津著「韩愈《毛颖传》新论」『文学遗产』(4)2018-07pp. 75 - 84

¹² 孙羽津前掲論文、pp76

¹³ 「方」は木の板、「策」は竹簡で、文字を記録する道具。「方冊」とも称する。程大昌『演繁露』参照。

¹⁴ 蔡倫：後漢中期の宦官、字敬仲。製紙法を改良し、実用的な紙の製造普及に多大な貢献をした人物という。『大辞林』参照

¹⁵ 程曾枣庄著『中国古代文体学』(上海人民出版社)2012

の号に賜った。さらに、親類の者たちは相思君のおかげで出世し、友人の羅浮山人も朝廷に出入し、ともに主上の寵愛を受けた。しかし、麴生（酒）、茗生（茶）が先に讒言して、結局相思君不遜の言によって、主上の怒りをかい、君は火の中に投げ込み、焼死してしまう。

③最後の太史公の評では、六、七十年前に相思君は有名ではなかったが、今では子供でさえ相思君を慕っているということは物の価値は時代により変化するという道理を示していると述べた。しかし、相思君は「口舌」で君主を感動させ、さらに子孫まで貴重になりながら、賢くなくてはこのようなはならなかったはずだと述べる。

④最後の部分は相思君への頌詩であり、この96字で24句からなる四言頌詩は簡潔に相思君の生涯を語り、その功績を讃えた。頌詩は中国古代の詩歌のジャンルの一種であり、歴史が古くて書くのも難しいと称される¹⁶。西周時代には非常に盛んで、西周から春秋時代までの四言詩を集めた中国初の詩歌集『詩経』に多くの経典が収録され、現在に伝えられている。また頌詩はいわゆる対象をくどく、特に君主の功德をたたえた詩であり、唐代の時期一時流行した。¹⁷ 韓愈も唐憲宗の功德実績を謳歌するために「元和聖徳詩」（807）四言頌詩を書いている。全文は1024字で、当時は五言七言頌詩が流行っており、これも格別の存在で、韓愈古文運動の代表的な作品だった。静斎のこの四言頌詩が果たして韓愈の影響をうけて書いたかどうかは、紙幅の制限のためにここでは検討しないこととする。

総じて、静斎の二編の作品は韓愈の「毛穎伝」をまねて書いたが、内容の構造の点では異なる。「楮思問伝」は構造からみれば、伝主の楮思問の生涯経歴より、方氏策氏の生涯を130字を費やしてより詳細に描いた。最後の居士評の部分も235字でほぼ全文の半分を占め、むしろ自分の考えを述べたいという作者の強い意志が伝わってくる。一方、「相思君伝」は「毛穎伝」

の構造と近いところがあり、まず伝主相思君の家柄の由来を詳しく紹介し、また相思君の仕えた経歴、特に君主に寵愛された状況を重点的に描き、その後君主が急に怒り出して相思君を殺したと寵愛とその変を強烈に描く。それによって君主の残酷かつ無情の一面を際立たせることができた。しかし最後の賛は静斎のオリジナルの部分であり、煙草に四言賛詩を作るのは滑稽が増す一方、朱子学者の擬古の詩風へのこだわりも現れている。

韓愈は伝主の真実性をアピールするため、史実典故を踏まえて毛筆の個人伝を作り出したが、静斎も同じように、「楮思問伝」で、書写材料として使われた方策の歴史や紙の発明について史実をもとに楮思問の伝を作り、また相思君伝の中にも、煙草の慶長年間伝来、及び当時幕府の煙草に対する禁令などの歴史も伝の中に織りこんでいる。しかし「楮思問伝」の舞台は中国に置いたにもかかわらず、評者は大初先生（静斎自身は大初居士と号す）いわゆる日本の評者であり、また「相思君伝」は日本の江戸時代初期に舞台を置いたが、評者は中国の前漢の司馬遷であると舞台の錯乱により明らかな矛盾を作り出し、読者に違和感を与えることを通じて文の面白さを増すことについて工夫した静斎の意識が窺えると思う。

四、静斎の経世意識と仮伝作品

本節では、当時の静斎が置かれていた状況と関連づけ、儒者としての静斎の経世意識から、仮伝人物の人物像を分析する。

（一）静斎の経世の願いと朱子学者の地位

静斎はもともと政治への関心が強く、著作の中に中国、朝鮮の政治事件及び日本の歴史に関する文章が多く書いている。例えば「送田辺子善序」の中で「我が門人は経術にこだわり、文章は一小技となす」と自分の門の目的は儒教思想で世を治めること、文書を書くことは小さい一技であると述べている。また『斯文源流』のなかで違う儒者学派間の争いについて触れ、「経天緯地の大業。いかでか一人一家の私を以て為すべけんや¹⁸」と儒者の大業はやはり経世で、世をおさめる

¹⁶ 曾枣庄著『中国古代文体学』（上海人民出版社）2012

¹⁷ 聂永华著「龙朔时期“颂体诗”考论」『运城学院学报』（27）2009-06, pp. 1-7

¹⁸ 「斯文源流」、『芋山集』に収録

ことの重要性を説いた。このような思いが一番現れているのは「私擬策問¹⁹」で、これは静斎が自分を中国の儒臣の身分に例えて、主君に経世の策を献じるといって書いた政治的な文章である。その中で静斎は国の滅亡や百姓一揆の原因について民が君主の徳に従わないことによるものであり、その解決策は「仁政」を施すこと²⁰であり、儒学の重視を呼び掛けている。

しかし、日本では海外の士大夫とは異なって、多くは浪人、医者・禅僧から出身あるいは転身した専門の儒者達は、大名等に雇われたとしても、「読み坊主」として、医者などと同じく、まともな武士とは格の違う特殊技能者として扱われるのが通例だった（渡辺浩 2008）、また、日本においては、唐土でもしばしばそうであったように、主君に直言・諫言することは命の危険が伴った（山本嘉孝 2021）。また静斎は雨森芳洲（1668 - 1755）への書簡の中で「程朱之学は極めて衰微している²¹」という嘆息を漏らし、江戸中期の朱子学の現状についての認識を表している。その文章は太宰春台（1680 - 1747）が亡くなり、又祇園南海（1676 - 1751）が健在であるとの記載があることから、1747年から1751年までの間に書いたことが分かり、静斎の「楮思問伝」成立時間の1750年ときわめて近い。このように政治への関心と朱子学者の地位の現状を押さえたうえで、まず「楮思問伝」主人公の造型を分析する。

（二）楮思問の造型と日本の儒者

「楮思問」の中で、主人公の楮思問についての役割は人が読書に疑問がある時、それを記録することであり、人は思問を頼りにしている。しかし、日本における楮思問の待遇について、思問を利用する人はまるで用が済んだらすぐ道具を捨てるように顧みないし、思問を利用しない人は株を守ってウサギを待つのも同じく、思問を使えないまま放置して結局虫のエサにしてしまう。つまり思問はきわめて地位が低いのだ。

これと対照的なのは思問の朝鮮での待遇であり、朝

鮮人は思問を尊び、思問を聡明子と見て、その言葉は人を聡明させると述べている。このような語りはまるで日本の儒者と朝鮮の儒者の地位の違いを鮮明にし、特にこのような状況について、静斎は「これは思問の罪ではなく、思問を使う人の罪である」と批判、前述した「私擬策問」で中国の科举文体を借りて儒学の重視を呼び掛けたように、静斎はこの仮伝で儒者特に自分を代表する朱子学者現状について訴えたと解釈されるのである。

（三）「相思君伝」と「毛穎伝」の比較について

次に「相思君伝」における相思君の仕官の様子と韓愈の「毛穎伝」の仕官の様子と比べながら、「毛穎伝」からの影響と静斎が描いた家臣像の独自性を明らかにする。

まず韓愈の「毛穎伝」から毛穎の秦始皇帝への仕官の経緯を改めて確認しておく。最初は將軍の蒙恬に捕えられ、秦始皇帝に仕えることになり、始皇帝から「管城子」と名付けられた。第二段階では、益々関係が深くなり、始皇帝が夜間政事処理するとき、毛穎と蠟燭を持つ宮人²²だけが側にいることを許される。最後の段階は益々禿になった毛穎は、物をかく技が衰え、始皇帝の意にかなわなくなり、遠ざけられる。

一方、相思君の仕官の経緯をみると、これも三つの段階に分けられる。最初に相思君は自薦して、上から召喚された。相思君が話をすると上が大喜びになり、その話には深みがあると褒める。第二段階では君は上に長生きができる呼吸の術を授けるために益々上に愛され、「通靈先生」の号を与えられるが、最後は相思君の無礼の言葉により、怒った上が相思君を火の中に投げこみ、殺されてしまう。

韓愈は毛筆の性質を念頭に置いて毛穎を擬人化して仕官の経歴を書いたのは文の内容により明らかである。毛穎の「管城子」の号は毛穎（毛の先）が束ねられ、管（筆の軸）に入れられて筆になる意を寓していることが分かり、また、始皇帝は蠟燭をもつ宮人と毛穎しか入れられないのも、毛筆を使う奏摺（上奏文）を処理することから来ているものと思われる。最後毛穎が疎遠されるのも毛先が落ちた老朽化した毛筆が連想

¹⁹ 策問とは古く中国で、官吏登用試験の際に、問題を出して、経義や政治についての試問をすること。また、その試問の文章である。漢典参照

²⁰ 原文「而至於井地之法、時苦難行者何哉、臣請不顧忌諱為陛下陳之、患在人主之德不能化天下耳」

²¹ 芋山集：「奉芳洲先生別幅」原文は程朱之学衰微極矣

²² ここでの宮人とは秦始皇帝の寝起きや更衣などきわめて私的な日常生活を奉仕する人と指す。漢典参照

できる。

静斎の「相思君伝」もこの技法の影響を受けたと考えられる。最初の上が君の話が縷々味があるという描写から煙草を吸えば吸うほど味がでるという意味で、その後の「吐古納新」と「通霊先生」の号も人が煙草を吸っている様子と飄然とした精神の状態と関連づけられるだろう。さらに、相思君の死に方も一見残酷だが、よく考えるとそれも煙草の燃えやすい性質に基づいており、このような悲劇の結末の描写と煙草の性質を関連づけて滑稽さが増していると言えよう。

しかし一方、民生や政治に支障があるため、いつも道教、仏教を批判している韓愈と違い、静斎が作った相思君の形象も明らかな道教の道士形象の影響を受けている。「吐古納新」は濁った空気を吐き出して新鮮な空気を吸い込むの意味で、『莊子』刻意篇から由来している、その中に「吹呬呼吸，吐故納新。熊經鳥申，為壽而已矣。此道引之士，養形之人，彭祖壽考者之所好也²³」とあり、要するに吐故納新を通じて寿命が長くなり、道士養生の好むものであるということである。また静斎は相思君のために博山爐、唾壺を設立した青霞子という人物を書き、これも隋唐の有名な道士蘇元朗を指し、彼は羅浮山の青霞谷で修道したため、青霞子を号したのである。相思君の友人の羅浮山人もここでは煙筒を指しているが、羅浮といたら道教の修練の有名な羅浮山が連想され、また山人の呼称は隠士、道士、道人、仙姑などと同じ道教の人を指すものである。特に相思君の由来と行方について、「君不知何部人」（君は何部の人は知らず）と「或曰、君実不死学道火化乗風而去、莫知其所終²⁴」の静斎の叙事表現は、卞東波（2021）が『器械擬仙伝』に使われている「不知何処人」の描写について、中国の雑伝の中で六朝時代の高士類雑伝の中によく使用する言葉であると述べた。すなわち、静斎の相思君の造型にもは中国の高士類雑伝の影響があると言えるだろう。また「莫知其所終」は司馬遷『史記』「老子列伝」の中に、「於是老子迺著書上下篇，言道德之意五千餘言而去，莫知

²³ 筆者訳：ゆっくり呼吸をし、古いものを出し新しいものを取り入れ、熊や鳥のように大きく動くことが、長寿の秘訣である、これは道引の士、形を養う人、彭祖の長寿者のような者の好みである

²⁴ 筆者訳：或いは曰「君は実不死して道に学んで火化して風に乗り去った。其終える処はまだ知らず

其所終²⁵」と依拠し、静斎もここで相思君の行方の推測について同じ表現を使用することを通じて、道教の始祖と呼ばれる老子のように、相思君に隠士のイメージと神秘性を与えている。総じて、静斎の「相思君伝」は「毛穎伝」の叙事風格の影響を受けるとともに、道教の隠士思想や高士類雑伝文学にも受容していることが明白である。

韓愈は「毛穎伝」で、嘗て大功ありながら、家臣が老いた時すぐ遠ざける無情の皇帝像を作り出し、静斎も絶対的な権力のもとで厚遇と冷遇を自由に行う酷薄な日本の君主像を描き出した。韓愈の「秦眞に恩少なし」という批判は、秦始皇帝の個人像を通じて当世の君主を暗喩していることは中国国内の学者の間ではほぼ通説になっている²⁶。

静斎は「相思君伝」の中に君主への批判はないが、ここで家臣の相思君、麴生、茗生の身分と日本の江戸時代の歴史的背景と関連づけながら、分析を試みる。相思君の描写から見ると道士と近い身分で、又技能を以て主君に仕える麴生、茗生の描写を通じて彼らは明らかに芸能者に属することが推測される。江戸時代の儒者佐藤直方は儒者の地位について「予年来嘆く事あり。学問を一芸として、儒者医者仏者天文者軍法者歌者俳諧師陰陽師碁所の類と、一同に思ふは、口惜き事也」と述べ、いわゆる近世では儒者と芸能者は同じ扱いことに憤懣を發している。また前に山本氏の説として述べたように、江戸時代の儒者は芸能者の一種であることが伝えてくる。以上のことから、静斎は、武士出身の家臣と違う蛮族出身の相思君の造型を通して、武家政権の絶対的統治の下で儒者を含め身分の低い家臣の生き様の一面を描き出したのではないかと考えるのである。

五、終わりに

本研究は、日本における仮伝作品を整理しながら、江戸儒者河口静斎の仮伝作品「楮思問伝」「相思君伝」を中心に、江戸朱子学者の文章観念と地位背景及び静

²⁵ 筆者訳：そして老子は上下篇を著書し、道德の意五千言余りを言つて去り、其終える処は知ることができない

²⁶ 孫羽津「韓愈《毛穎傳》新論」『文学遺産』(4) 2018-07pp. 75 - 84

斎の経世意識を関連づけながら、分析を行った。

静斎は絶対的権力を持つ君主が気ままに厚遇と冷遇を行い、その権力の下で命が翻弄され、寵愛を受けるため争いを行う家臣像と、学問の才能持ちながら、他国で尊重されているにもかかわらず日本で評価されていない儒臣像を描くことを通じて、韓愈の「毛穎伝」に含まれる君主への風刺と異なり、もともと中国と朝鮮の儒学者の地位と違い、政治とのかかわりが薄い、地位が低い日本儒者の独自の意識を表現したと考えられる。

2018-07pp. 75-84

黄晓菊, 赵维国著「论假传的文人旨趣及其“以文为戏”的理论反思」『文艺理论研究』(36) 2018-06pp.125-131

卞東波著「戏拟之间：日本汉文假传集《器械拟仙传》的叙事张力」『文艺理论研究』(6)2021-01pp.26-35

参考文献

- 菊池謙二郎編『幽谷全集』吉田彌平 1935
- 兵庫県史編集専門委員会編『兵庫県史 第三卷』兵庫県 1978
- 孙昌武著『唐代古文运动通论』百花文艺出版社 1984
- 郭预衡著『中国古代文学史』上海古籍出版社 1998
- 渡辺浩著『近世日本社会と宋学』東京大学出版会 2010
- 曾枣庄著『中国古代文体学』上海人民出版社 2012
- 張文朝著『日本における『詩経』』学史経学史研究叢刊 2012
- 山本嘉孝著『詩文と経世 一幕府儒臣の十八世紀一』名古屋大学出版会 2021
- 山本嘉孝著「目安箱と韓愈一室鳩巢における唐宋古文・朱子学・経世の連関一」『唐宋八大家の探求』花書院 2021
- 東英寿著『唐宋八大家の探求』花書院 2021
- 于泓, 毕宝魁著「浅析韩愈《毛颖传》的深层思想」『广东社会科学』(2) 1994-04pp. 108-110
- 程刚著「文道合一与诗乐合一朱熹与邵雍文学本体论之比较」『孔子研究』(05)2008-09pp.58-69
- 聂永华著「龙朔时期“颂体诗”考论」『运城学院学报』(27) 2009-06pp.1-7
- 李杉婵著「朝鲜假传对中国唐宋叙事文学影响的接受」『前沿』(15) 2013-08pp.191-193
- 张红著「江戸初期朱子学派的诗文观念及杜甫接受」『中国文化研究』(冬之卷) 2017-11pp.160-171
- 孙羽津著「韩愈《毛颖传》新论」『文学遗产』(4)

令和4年度プロジェクト研究概要

江 山
(プロジェクト研究指導補佐)

●前年度プロジェクト研究の課題

前年度のプロジェクト研究では Zoom による遠隔授業だったため、発表者同士の交流時間が確保されにくい問題がありました。コロナウイルスの影響で、令和4年度のプロジェクト研究も全てオンライン開催になりました。

前年度の問題を踏まえ、今年度は共通テーマを検討する時間を増やし、授業外での発表者同士の交流を促進する時間を設けました。その結果、前年度の問題は一定程度の改善が見られました。

●授業について

今年度のプロ研授業も例年通り、共通テーマの検討から始まり、発表者は4人でした。以前から取り挙げられていたプロ研の課題である共通テーマを見つけ出すことについては、今年度は発表者同士の交流を促進する方法を模索し、実施しました。その結果、前年度と比べると、今年度は共通テーマを早い段階で決めることができました。

提案と議論が重なり、発表者4人の提案で最終的に共通テーマは「地域に眠る宝を活かして—『孤・個』の歩みから『共』につながる社会へ—」に決まりました。共通テーマの意図や経緯は三木先生の「報告集巻頭文」の中に詳しく書かれていますので、ここでは省略させていただきます。

共通テーマは順調に決まりましたが、例年通り研究手法と研究対象が異なるため、共同研究としてまとめることは容易ではありませんでした。しかしながら、発表者同士で研究を通して、各個人の多大な努力とお互いに学び合う姿勢が見られ、最終的にいい報告会を開催することができたと思

います。

今年度のプロジェクト研究の授業スケジュールは表1に示されている通りです。今年度の参加者は積極的に発言し、授業中に議論ができ、違う専門分野の院生同士にとって有意義な時間でした。

今年度のプロジェクト研究を通して、一つ大きな問題がありました。それは、発表者や参加者によるコロナウイルス感染です。今年度の12月、1月頃に中国や日本でコロナウイルス感染が拡大し、発表者や参加者の中で数名感染者が出ました。特に発表者が感染したため、調査や研究に支障が出ました。予定通り調査ができなくなったり、体調不良で研究が進まなかったり等の報告を受けました。しかし、発表者の学生達は感染したにも関わらず、研究を諦めることなく、体調不良の中でも調査を続けました。その結果、最後の報告会では十分に研究成果を発揮することができたと思います。今後、この過程で得た経験は必ず生活や研究の中で生きてくると思います。

最後に、今年度のプロジェクト研究の反省点として、研究計画発表の時間の不足が挙げられます。今年度の研究計画発表は一回だったため、先生方の意見が十分に反映されず、研究計画が定まらないまま、研究を進めた院生がいました。その結果、研究目的が二転三転し、報告会の直前まで結論はまだ出ていない状況となりました。研究計画は非常に大事なため、今後は研究計画検討の時間を多く設けることが必要だと思います。

表 1 令和3年度プロ研授業スケジュール (案)

1	10/07	オリエンテーション
2	10/14	共同テーマ検討
3	10/21	共通テーマ検討
4	10/28	共同テーマ検討
5	11/4	研究計画発表 (4名)
6	11/18	進捗状況発表 1回目 (2名)
7	11/25	進捗状況発表 1回目 (2名)
8	12/2	報告準備
9	12/9	進捗状況発表 2回目 (4名)
10	12/16	研究結果発表 (2名)
11	12/23	研究結果発表 (2名)
12	1/6	最終発表 1回目 (4名)
13	1/20	最終発表 2回目 (4名)
14	1/27	リハーサル
	1/28	報告会

●報告会について

今年度のプロジェクト研究報告会は表2で示したプログラムのとおり行われました。

地域政策科学専攻長の竹内先生による開会の辞で報告会が始まりました。次に、今年度のプロジェクト研究担当教員の三木先生が今回の共同テーマの趣旨を説明しました。

その後、黄さんによる発表が行われ、コメンテーターを担当した町先生から、黄さんに対しコメントが述べられました。そして、前野さんによる発表が行われ、コメンテーターの安部先生は前野さんの発表に対してコメントが述べられました。5分休憩の後、程さんと任さんによる発表が行われ、高津先生がそれぞれの発表に対してコメントしました。

最後に、今年度のプロジェクト研究担当教員の富原先生の司会により、コメンテーターと発表者を交えて、共通テーマをもとにしたディスカッションが行われ、人文社会科学科長の松田先生による閉会の辞を持って無事に報告会は閉会となりました。

●報告会の課題について

コロナウイルス感染症の影響で、今年度のプロジェクト研究報告会は、去年に続き Zoom による

オンライン開催の形で開催されました。学内外から30名ほどご参加いただきました。そして、発表者への質問、コメントをいただき、発表者にとっては、研究に関するとても貴重なアドバイスを得ることができた有意義な報告会になったと思います。しかし、今年度のプロジェクト研究報告会を振り返ると、今後改善すべき課題があったと思います。共通テーマについての検討の不足です。

前述のように、今年度のプロ研はコロナウイルス感染の原因で院生それぞれの調査、研究に支障が出ました。そのため、1月に入り、発表者それぞれは自分の研究に専念しなければならなかった状況となり、共通テーマとの関連性をしっかり検討する時間が十分に作れませんでした。これは共通テーマを掲げた報告会としては達成できなかった部分であると思いました。今後は発表者に共通テーマについての検討の時間を十分に設け、発表者の専門分野から共通テーマをどう捉えるのかを議論させたいと思います。

●謝辞

最後になりますが、今年度のプロジェクト研究を担当した3名の先生方三木先生、西村先生、富原先生、ご多忙にもかかわらず、コメンテーターを引き受けてくださった町先生、安部先生、高津先生、また、開会と閉会のご挨拶をしてくださった竹内先生、松田先生にこの場を借りて感謝を申し上げます。

表 2 令和4年度プロジェクト研究報告会プログラム

地域に眠る宝を活かして —「孤・個」の歩みから「共」につながる社会へ—		
司会者：富原一哉教授		
13:00 ~ 13:05	開会の辞	地域政策科学専攻長：竹内勝徳教授
13:05 ~ 13:15	趣旨説明	三木夏華准教授
13:15 ~ 13:35	中国少数民族観光におけるホストとゲストに関する研究—土家族を事例として—	黄秋実
13:35 ~ 13:45	来場者による質疑応答	
13:45 ~ 13:55	コメンテーター評論	町泰樹准教授（鹿児島工業高等専門学校 一般教育科）
13:55 ~ 14:15	「地域の親グループだからこそできる」親支援プログラム—地域に根ざした発達障害児の親支援の取り組み—	前野明子
14:15 ~ 14:25	来場者による質疑応答	
14:25 ~ 14:35	コメンテーター論評	安部幸志教授
14:35 ~ 14:40	休憩	
14:40 ~ 15:00	近世日本における中国笑話の受容—『笑府』の抄訳本を中心に—	程茗
15:00 ~ 15:10	来場者による質疑応答	
15:10 ~ 15:20	コメンテーター論評	高津孝教授（放送大学 鹿児島学習センター）
15:20 ~ 15:40	河口静斎の仮伝作品研究—「楮思問伝」と「相思君伝」を中心に—	任軼
15:40 ~ 15:50	来場者による質疑応答	
15:50 ~ 16:00	コメンテーター論評	高津孝教授（放送大学 鹿児島学習センター）
16:00 ~ 16:05	休憩	
16:05 ~ 16:25	ディスカッション	
16:25 ~ 16:30	閉会の辞	人文社会科学研究科長：松田忠大教授

プロジェクト研究を振り返って

黄 秋実

コロナ禍が3年目に入る2022年。今年度は「地域に眠る宝を活かして—『孤・個』の歩みから「共」につながる社会へ—」という共同テーマを設定した。

少数民族観光は異文化を直接体験することで、ホストとゲストの間に従来にはない規模の相互関係を発生させるにもかかわらず、中国における研究成果は数少ない。そのために、私は観光人類学における「ホストとゲスト」論から、土家族を事例とし、少数民族観光におけるホストとゲストの関係を明らかにし、少数民族観光におけるホストとゲストのあるべき姿や少数民族観光の行方を探ることを主たる課題とした。

調査を行った彭家寨という土家族村落では、少数民族の文化資源や人的資源を活かし、従来孤・個の社会を歩いてきたホストの生々しい生活の様子をゲストに展示しており、両者間の新しい交流方式と関係をもたすだけでなく、「『孤・個』の歩みから「共」につながる社会へ—」というテーマに繋がっていると見える。

新型コロナウイルスの影響に伴う現地調査は非常に困難である。そのため、私は少数民族観光におけるホストとゲストに関する既往研究をレビューし、中国における使用人数の多いSNSまで投稿したコメントや写真を収集して分析した。それらのデータと現地調査によって得られたデータと結びながらようやく研究報告を作成した。

もちろん、私以外の3人の学生も、報告を作る過程でさまざまな苦勞をした。特に、共通テーマを設定するのは、最初のうちは非常に大変だった。みんな研究の方向性が違うので、時間的にも空間的にも非常に幅が広いといえる。このような状況

であったため、共通テーマの決定は難しかったが、皆にとって大変勉強になった。専門以外の分野のものを知り、様々な研究方法を知り、他の人の研究に対する姿勢を知ることができ、皆にとってとても良い機会だった。というわけで、今回の研究発表会の最大の収穫は、「勉強になった」ということである。

最終報告書を作成する前に、各回の授業で研究発表を行い、先輩や先生方の貴重なご意見を伺い、反省をした。このプロセスは、私にとって非常に有益なものである。また、今後の研究でも、衆知を集めて、広く有益な意見を採用しながら、自分の研究を進めていこうと思う。

前野 明子

「プロ研があって良かった!」。半年間のプロジェクト研究（プロ研）を振り返った、今の率直な感想である。

今年度のプロ研も発表者4人の共通テーマの検討から始まった。私の専門は臨床心理学。他のメンバーの専門は観光人類学と漢文学。授業開始当初は「本当に共通点があるのか?」とゴールの見えない不安を覚えたが、一方で「これから未知の世界との遭遇が始まる」という何だかワクワクした感覚もあった。4人の共通テーマを見出すのは簡単ではなかったが、それでも授業時間外にも4人で集まって、自分の研究について話をしたり、それぞれが考える共通点のキーワードを挙げたりしながら、お互いがつなげる努力を重ねた。その結果、「地域に眠る宝を活かして—孤・個の歩みから 共につながる社会へ—」という共通テーマが生まれた。苦勞した分、私はこの時点でプロ研の目的をほぼ達成したような錯覚を覚えてしまった。

その後の授業は、毎回資料作成に追われ、発表後の先輩や先生方からの質問に答えることに必死だったが、頂いた質問が自分の研究の大切なポイントであることに後から気づくことが度々あった。また、自分とは異なる専門性を持つ方々にわかりやすく伝えるために、自分の研究を今までとは違う角度から捉え直したり、その意義について改めて考えたりする時間となった。

また、プロ研の発表会で頂いたコメントを通じて、研究としての課題にも気づかされた。特に、メンターの方の安部先生には、当日の発表だけではなく過去に執筆した論文も読んで頂いた上で、実証的な研究として精度を高めるために必要なポイントについて丁寧にご示唆頂いた。当日は上手く咀嚼出来ずに、的確な回答ができなかった部分もあったと思うが、自分が取り組んだ研究の成果を明確に示すことが出来るよう、今後の研究デザインを考えていきたいと思う。そして、これまでの臨床経験を土台に、地域の人々が共に元気になれるような、「臨床と研究がつながる研究」に取り組んでいきたい。

今回のプロ研を通じて同様に研究を志す仲間に出会えたことも、大きな励みとなった。発表内容は、まだ不十分な点も多かったが、研究の奥深さ、面白さに触れられた半年間であった。プロ研を終えた今、家族や職場、協力者の支えにより研究を続けられる幸せを実感している。最後に、半年間ご指導いただいた富原先生、三木先生、西村先生、そして江先生に心より御礼申し上げます。

程 茗

今学期を振り返ってみると、共通テーマの選定について、最初の検討から最終的な決定までの過程が印象的でした。今年度のプロジェクト研究のテーマは「地域に眠る宝を活かして一孤・個の歩みから共につながる社会へー」です。専門分野が異なるので、共通テーマを意識しながら、自分なりの研究を進めるのは本当に難しいとつくづく思

うと同時に、チームワークの重要性にも気づきました。

毎週、皆様の発表を聞いていると、観光人類学、心理学や社会学など、さまざまな専門分野に触れることができ、視野も広がっています。プロジェクト研究では、プレゼンテーションの練習をするチャンスが多く、今後の学術論文の発表に大いに役立つと思っています。また、発表後には、先輩や先生方が発表内容について丁寧にアドバイスしてくださり、大変勉強になりました。だから、時間が経つにつれて、心の中で不安や戸惑いが少しずつ消えていきました。博士後期課程の皆様の専門分野が異なるからこそ、多種多様な世界や景色が見えてくるのだと初めて気づきました。これもまた、私にとって非常に貴重な経験となっています。

最後、言語資料の整理から原稿の修正まで、指導教官の丹羽先生にはいろいろご指導して下さって、誠にありがとうございました。また、メンターの高津先生から貴重なご意見をいただき、今後も研究に活かしていきたいと思っています。さらに、富原先生、三木先生、西村先生からプロジェクト研究の授業でご助言いただき、および地域政策特任助教兼教務補佐員の江山先生から、共通テーマの設定から発表会の準備までいつもご支援いただき、この場をお借りして、再び心より感謝申し上げます。

任 軼

前には夏さん、石原さんのプロ研の発表を伺ったことがあり、「プロ研で共通テーマの考案はやはり大変難しい」と思いながら、彼らの努力の姿に感心していた。自分の番になる時も必ず共通テーマを繰り返して検討しなければならないと心構えていたが、前野さん、程さん、黄さんのおかげで、共通テーマが思ったより順調に決まった。ここで皆さんにお礼申し上げます。

しかし、自分の研究についての計画発表や進捗状況を報告することになると、なかなか思う通り

に進まなかった。毎回授業の前に緊張してたまらない気持ちは今でも鮮明に覚えている。三木先生も富原先生、西村先生は優しいながら、「研究の目的がはっきりしない」、「もっとわかりやすく、専門外の人にもわかるように」など助言と指摘をしていただいた。先生らの意見を通じて、自分が論文を書く時及び発表する時の足りないところに気づき、これから近世文学に関する基礎をもっと固めたいと決心した。

発表会の数日前に、まだ結論の部分とよくつながらないため、丹羽先生のご指導のもとで、原稿を書き直しの日々を過ごした。いよいよ発表会の日を迎え、コメンテーターをしてくれる方は高津先生であり、先生は私の発表について、足りない部分を指摘されながら、励ましの言葉もいただいた。これはもともと自信が足りない私にとって何よりの言葉になると思う。今回のプロ研を通じて、ようやく学問の作法と近づけたような気がする。今後もプロ研の授業から得た経験を学術の研究にかしたいと考えている。最後、休日を犠牲してまで指導してくれた丹羽先生、授業でいつも丁寧に指導してくれている三木先生、富原先生、西村先生、始終プロ研の全般に尽力し、いらいらしている私を慰めてくれた江山先生をはじめ、今回のプロ研に多大な助力を頂いた皆様再びお礼申し上げます。

プロジェクト研究とは

「プロジェクト研究」は、地域政策科学専攻の必修科目である。この授業を通して、学生は自己のテーマや調査研究方法を模索し、中間発表を重ねて教員や他の学生からの意見や助言を聞き発表内容を固めながら、他分野の発表を聞き意見を陳述することで、研究者としての力を総合的に高める。

*プロジェクト研究報告会は、この授業の一環として学生主体でテーマを決め、開催するものです。

令和4年度「プロジェクト研究報告会」概要

総合テーマ：地域に眠る宝を活かして―「孤・個」の歩みから「共」につながる社会へ―

開催日時：2023年1月28日（土）13:00～16:30

会場：Zoomによるオンライン開催

◇研究報告

黄 秋実（文化政策コースD1）

前野 明子（地域政策コースD1）

程 茗（文化政策コースD3）

任 軼（文化政策コースD1）

◇コメンテーター

町 泰樹（鹿児島工業高等専門学校 一般教育科 准教授）

安部 幸志（鹿児島大学法文学部教授）

高津 孝（放送大学 鹿児島学習センター所長）

◇司会

富原 一哉（鹿児島大学法文学部教授）

令和4年度「プロジェクト研究」参加者一覧

履修院生：

地域政策コース 石原 明子（2年） 前野 明子（1年）

文化政策コース 程 茗（3年）、夏 晨光（2年）、黄 秋実（1年）

任 軼（1年）、趙 珂（1年）、王 宗成（1年）

担当教員：西村 知（島嶼政策コース・人文社会科学研究科教授）

富原 一哉（地域政策コース・人文社会科学研究科教授）

三木 夏華（文化政策コース・人文社会科学研究科准教授）

指導補助：江 山（人文社会科学研究科特任助教）

プロジェクト研究報告集 第20号

印刷 2023年3月25日

発行 2023年3月31日

発行所 鹿児島大学大学院人文社会科学研究科

(博士後期課程) 地域政策科学専攻

〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元一丁目21番30号

TEL・FAX 099-285-3573

E-mail lehdoc@leh.kagoshima-u.ac.jp

URL http://www.leh.kagoshima-u.ac.jp/wp_leh/?page_id=13129

印刷・製本 濱島印刷株式会社

©2021無断複写・転載を禁ず

ISSN 1882-5648